

水大学園だより

独立行政法人水産大学校 〒759-6595 下関市永田本町2丁目7-1 電話0832(86)5111
[発行] 学生課 ホームページ <http://www.fich-u.ac.jp>



ご挨拶

理事長 藤 英 俊



皆様には、日頃本校の教育・研究にご理解とご支援を賜り、衷心より御礼申し上げます。

さて、昨年一年間を反映する漢字として「命」が選ばれました。また、無限の可能性を育てる教育現場においても、痛ましい事件・事故が相次い

だことは残念でなりません。今年も、皆様にとりましても、本校にとっても明るい良い年になるよう期待し、私もそのために努力したいと思っています。

大学入試センターによりますと、平成19年度センター試験の志願者数は、55万人（前年度比0.4%増）とのことです。志願者の増加は、センター試験を利用する大学の増加によると思われ、高校既卒業者の志願者は5.5%も減少しています。今年から大学入学枠と志願者数が同じになる「全入時代」に入ると言われ、18歳人口の減少とともに国立大学法人や私立大学の統合が進む方向にあるなど、高等教育を取巻く環境は激変しています。

一方、中国などの経済発展や食の安全性への関心の高まりによって、世界的に水産物が注目を浴び、獲得競争が展開され、魚価が上昇する等我が国の水産業にもようやく明るい兆しが見え始めています。

このような中で、本校は唯一の農林省所管の高等教育機関として平成13年度から独立行政法人となって以降、中期計画に基づき事務事業を進めており、18年4月からは第2期中期計画期間に入りました。本年は、練習船耕洋丸の代船が完成しますので、練習船天鷹丸と連携し、高度な水産系海技士の養成教育を行うとともに、練習船を最大限に利用した生産（漁獲）・鮮度管理・加工そして流通まで一貫した教育と研究の充実、重点化に努めて参ります。また、次世代へ水産の技術と経験の継承にも努め、学生にとって魅力のある、また水産業界に一層貢献できる大学校を目指し努力して参ります。

次に、18年度のこれまでの主な事務事業等の動きについて、ハード面とソフト面に分けてご紹介いたします。

ハード面：1) 新耕洋丸の建造開始「起工式：昨年9月5日、進水式：本年2月2日、完成予定：6月末」2) 体育館・武道館建築工事「昨年5月1日から旧標本館を研究準備等に移設後解体撤去。完成：本年1月末予定」3) 講義棟の全

面建替「平成19年度内に完成予定」

益々教育環境は充実しており、学生にとってより勉学に励める快適な学園整備が進んでいます。

ソフト面：1) 第1期中期（平成13年度～平成17年度の5ヶ年）計画の実績評価において、農水省や総務省の独立行政法人評価委員会から良好な評価を得る。2) 第1期中期計画の実績評価を受け、18年4月1日から第2期中期計画（5ヶ年間）に入る。役職員は非公務員となる。3) 平成18年度入学試験の推薦入試にC制度「海技士取得を目指す者、養殖業及びその関連産業の後継者、養殖業及び増殖業の指導者又は技術者を目指す者」を導入し、意識の高い学生の確保に繋げる。4) 教職員でカリキュラムの見直しや勉強会を開催。5) 動機付け教育としての新カリキュラム「水産学概論」を全教職員で検討し、平成18年度入学生から開講、良好な結果を得る。6) 研究面で外部資金導入の目標である1億円を突破。7) フク醤油の完成（食品科学科）8) ホームページを一新。個々の内容は逐次改正中。9) 12月初旬に日本技術者教育認定機構（JABEE：Japan Accreditation Board for Engineering Education）による技術者教育プログラムの審査・認定のための実地相談を受け、本審査に向けて教職員が一丸となって努力中。

現在、本校には47都道府県出身の886人の学生が在籍し、各人が将来の目標に向かって、勉学は勿論、クラブ活動等に元気で着実に前進しているところですが、今後とも、本校の教育理念である「水産に関する学理及び技術の教授及び研究を行うことにより、水産業及びその関連分野を担う人材の育成を図る」に従って、より特色を発揮し水産高等教育機関として全国から注目され、評価が得られるよう一層努力して参りますので、引き続き本校の教育・研究等にご支援、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

注：JABEE（日本技術者教育認定機構）とは、高等教育機関で行なわれている教育活動の品質が満足すべきレベルにあるか、また、その教育成果が技術者として活動するために必要な最低限度の知識や能力（Minimum Requirement）の養成に成功しているかを認定する機関です。本校がこの機構の審査を受け認定が得られれば、本校の教育活動の成果・有効性・品質が世界的に認められたこととなります。

最近の話題

新耕洋丸誕生

耕洋丸船長 田 淵 清 春

長年聞き慣れた、単調なエンジン音が下から規則正しく響いてくる。昨年12月11日朝、豊後水道に入り速吸瀬戸を抜け、伊予灘、周防灘を經由して、夕方、関門海峡東口に投錨仮泊した。現耕洋丸も残り2航海でお役目を終わり、6月からは新しい耕洋丸に後を託すことになる。この7、8年は永年劣化によるパイプ破損に悩まされ、航海中はパイプ作製、交換の毎日であった。現耕洋丸は昭和53年に竣工したが、振り返ると本船に初めて乗船したのがその翌年であった。当時はまだ三等航海士、初めてホノルルに上陸、その後パナマ運河を抜け、大西洋を南下し、アマゾン川を上り、ベレンに入港、ベレンに在住しているたくさんの日系人の人たちが来船したが、中には日本の船が来たことを知り、数百キロ離れた開拓地から、わざわざ車を飛ばして来る人もいた。当時、アマゾン川河口水域はエビの漁場で、ブラジル側から十数人の研究者が乗船し、共同で漁業調査を実施した。その頃乗船していた学生が、もう働き盛りの50歳となり、各地で活躍しているが、現耕洋丸も今年で船齢29年を迎えることとなった。

耕洋丸代船建造の構想は随分前からあったが、この度、多くの関係者の支援により平成17、18、19年度に代船の建造予算処置がなされ、現在、下関彦島の三菱重工下関造船所で建造中である。本校の目的は「水産に関する学理及び技術の教授及び研究を行うことにより、水産産業を担う人材の育成を図ること」と定められており、練習船の使命は「学生を乗船させ所定の学科目を教授し、併せて水産に関する調査・研究を行う」とされている。また、水産技術に立脚した船舶職員を養成する高等教育機関としての機能も必要とされており、新耕洋丸はこれらの役割を果たすことができる練習船であることが求められている。限られた予算の中で教育・実習環境、漁労・調査・研究設備、居住環境などを充実させ、国内・国際法の遵守はもとより、海洋環境・地球環境に優しい船舶とすべく、建造仕様書が作成された。

中でも特筆すべき点は、魚群の定量的な把握、魚体の大きさ、漁具の形態や魚群との相対関係さらにトロール装置への負荷状況の情報を的確に入手、解析することにより最適状態での操業を可能にするトロールシステムを装備したことである。当装備が今後、どのような成果を発揮するか、各方面から注目されている。

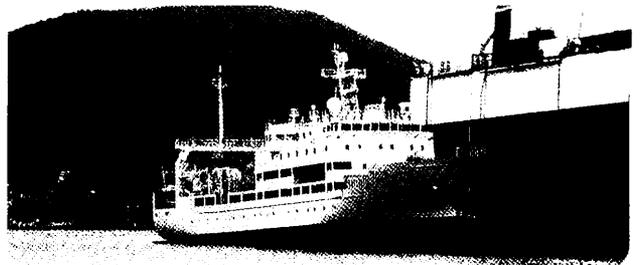
昨年9月に起工式が行われ、今年6月末竣工の予定で工程表通り工事は進み、本船が帰港した昨年12月には船体上に主機関、発電機がすでに搭載されていた。1月中旬には船橋を含む上部構造が搭載され、新耕洋丸の全貌が姿を現し、2月2日には長さ87.5m、総トン数2300トンの白い船体が巖流島を背に進

水することになる。

理事長の年頭の挨拶の中で「充実した教育・研究設備を持つ練習船をどのように活用して、特色ある教育が行われ、また、調査・研究の業績があげられるかが問われることとなります。」との説明があったが、我々乗組員、特に海事教育職員はこのことを重く受け止め、安全運航に徹するとともに、教育、調査・研究成果の向上を図らねばならない。



平成19年2月2日に進水式が行われました



関門海峡に優美な姿を映した新耕洋丸

耕洋丸（4世）の建造すすむ ～海洋生産管理学科からも大きな期待～

海洋生産管理学科 助教授 下 川 伸 也

21世紀の幕開けとともに、本校練習船「耕洋丸」の代船建造が認められ、本年6月末の竣工に向けて急ピッチで工事が進められています。

本船は、全長87.5m、幅13.6m、深さ8.8m、主機3400kW（2サイクル低速ディーゼル）、総トン数2300トンの規模であり、現耕洋丸より一回り大きく、実質的に日本最大級の漁業練習船として就航する予定です。船体の安定性、堅牢性を高めるため上部構造物には軽合金を用いたり、次世代の航海訓練に対応するための抵抗軽減を図った船型の採用、ハイテク機器を駆使した海洋調査機器類の搭載などの最新の設計となっており、海技士教育を柱の一つとして教育を行っている海洋生産管理学科も、特に大きな期待を寄せています。

三菱重工業(株)下関造船所において建造が進められていることもあり、本学科の専攻科、4年生及び3年生諸君も建造状況の見学会が順次行われています。特に、初航海に乗船が予定されている4年生や遠洋航海での乗船が見込まれる3年生は、建造が開始された直後のブロック接合から見学に立ち会い、

船舶建造の過程を詳細に見聞する貴重な体験ができました。

3年生にとっては、専門教科として海技士関係科目が開講され始める時期です。乗船実習の経験と相まって教育効果を高められることから、この竣工間もない新耕洋丸において航海実習できる機会に恵まれることは、高い効果が期待できます。本年10月から来年2月までの間に実施される遠洋航海実習に参加し成果を得るためにも、キャンパスでの座学に集中するとともに、乗船時には新船のハイテク機器類の操作にいち早く慣熟し、船舶運航技術の習得に向けて一層の努力をすることを教員一同が誓い合いました。



建造中の新耕洋丸を見学しています

水素エンジン船と水産業および機械工学の関わり

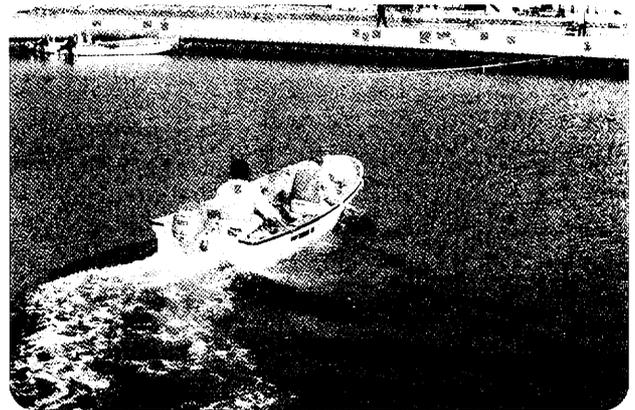
海洋機械工学科 教授 江 副 覚

水産業は、食の資源・安全、環境保全とその裾野は広く多岐にわたります。私たちは多くの水産物からタンパク質等を得ています。安心して食できる水産物を安定して維持するためには、水産業の体質強化と海洋環境保全が不可欠です。こうした中、高騰する石油の代替燃料としてまた環境に優しい資源循環型の燃料として水素燃料駆動漁船の開発を目指して私たちは水素エンジン船を試作しました。漁船への燃料電池の応用は、現状では技術的・コスト的に無理があります。本水素エンジンは軽油やガソリンを燃料とする現有エンジンの燃料系等を改造し水素エンジン化したものです。改造後、水素エンジン実験船として初めて日本小型船舶検査機構の立ち会いの下、海上試運転を行いました。初期投資が少なく導入に有利と思われるので、今後インフラ整備と併せて、山口県内や島根県内で漁船としての実証試験を考えています。

このような取り組みは本校と関連企業が連携しながら行っていますが、平成18年度、下関とアイスランドの水素燃料駆動船舶事業として日本貿易振興機構(JETRO)のL-L事業に採択されました。そして山口県や下関市の協力を得て、駐日アイスランド大使らを下関に招いて水素エンジン船のデモンストレーションと水素エネルギーに関するシンポジウムを開

催しました。この様子はテレビや新聞等でも大きく取り上げられ注目を集めています。北極圏に位置するアイスランドは水産国であるとともに世界に先駆けて水素社会構築を宣言した国です。下関とアイスランドとは人口や鯨等で共通点が多々ありますが、水素を共通のテーマに交流を深めたいと考えています。

このほか水産業には環境保全と同時に、省力化や効率化による水産振興が求められています。海洋機械工学科では、機械工学を基礎にした教育と研究を通じて水産業に貢献する人材を育成しています。お陰様で就職も良く、卒業生の働きは多くの企業で評価され感謝されています。どうぞ水産における機械工学にご理解とご支持をお願いいたします。



水素エンジン船のデモンストレーション

中国上海水産大学との交流の始まり

食品科学科 教授 福 田 裕

中国側から眺めると、日本海、東シナ海、渤海湾を真ん中に日本、韓国が位置しています。一方、水産大学校は、世界の水産の最もホットな中国を含む東アジアを望む好位置にあります。

最新の情報では、2004年の中国漁業生産量は4,902万トンと報告されました。1989年に世界の首位の座を日本と交代した後も、経済の発展が漁業生産を促した結果であります。全養殖生産量が漁業生産量の半分以上を占める国は中国以外にありません。内水面養殖生産(2004年、1892万トン)は20世紀の後半に地球上に新たに出現した水産動物タンパク質資源として、世界の漁業生産量を唯一押し上げています。

水産大学校と韓国との交流は既に始まっていますが、巨大な中国水産業の機関車として教育と産業振興に大きな役割を果たしてきた上海水産大学との交流に向けた動きを紹介します。

私は2006年11月上旬に招かれて、上海水産大学の「2006中日水産品安全の現状、制御及びトレサビリティに関する検討会」で講演を行いました。「食品表示と科学的判別技術」と題し、表示法とそれを科学的に証明するためのDNA解析の到達点について話題を提供しました。このテーマは、2010年の上海世界博覧会に向けた食品安全対策のために要請され

たものであります。その他には、「養殖フグに関する安全と品質制御の試み」と題する講演も日本のフグ加工会社からあり、中国の人々のフグに対する感心の高さには驚かされましたが、同時に、これがフグの街下関の水産大学からの情報発信であったらと、両大学の交流の必要性を強く念願した次第です。

幸い2007年早々に上海水産大学から王錫昌食品学院院长が来訪する予定があります。王学院長は、私が1996年から2000年まで上海水産大学で淡水魚すり身開発共同研究で悪戦苦闘したときの中国側のカウンターパートで、その後、京都大学で学位を取得しました。当時、私の教室の大学院生だった袁春紅氏(写真右)は現在北海道大学助手として活躍中です。王学院長の来訪目的は、水産大学との学術交流協定の下準備、マグロの調査、及び中国淡水魚すり身の加工と利用の意見交換であります。これを機会に両大学の教員、学生の行き来が始まり、共同研究に発展することを念願しています。上海水産大学との連携の成果が、我が国の水産業界に還元できるようにするためにも、同窓生の皆様のご助言や参画が力になると思いますので、何とぞご支援をよろしくお願いいたします。



上海水産大学での共同研究風景

Zoological Science Award 2006 の受賞報告

生物生産学科 助手 高橋 洋

フグ、メダカ、トゲウオ。皆さんはこれらの名前を聞いて、どのような共通性を思い浮かべますか？これらは、現在までにそのすべての遺伝情報(ゲノムの塩基配列)が解読されている魚類です。私はこのうちトゲウオ科魚類について、他種との交雑を防ぎ、種の独自性を保つ遺伝的な仕組みについて研究を行いました。発生学や遺伝学など、さまざまな実験手法を組み合わせて調べた結果、驚いたことに、その仕組みに、ショウジョウバエから魚類まで、共通の法則がみられることがわかりました。今回、その成果を論文として公表し、それに対して表記の賞を頂きました。

ここで、今回認められた共通の法則について簡単に説明したいと思います。生物がオスになるかメス

になるかを決める染色体を性染色体と言い、トゲウオの場合は、人と同様にX染色体とY染色体がそれにあたります。今回みられた法則とは、進化の過程で、まずヘテロの性(XY、つまりオス)のほうから、種間交雑を防ぐ仕組みが現れるというものです。また、トゲウオでは、その原因となる遺伝子が、雄の生殖巣(白子)の形成に関わる遺伝子ではないかと考えられ、この点でも、ショウジョウバエと一致しています。

現在、すでに解読されたゲノム情報を手がかりに、他種との交雑を防ぐ“鍵”の役割をする遺伝子の特定を目指して、さらなる実験を行っています。昨今のマグロ問題などに象徴されるように、天然の水産資源は減少しつつあり、農作物のように、人にも環境にも安全で美味しい優良品種の開発が重要な課題となっています(もっとも私は天然物に目がないのですが)。“鍵”遺伝子は、優良品種の固定や、改変された遺伝子の自然界への逸散を防ぐために用いることができることから、ポストゲノム時代の水産育種において重要な役割を果たすと期待しています。



Zoological Science Award 2006の受賞後の集合写真

水産情報館の完成

水産情報経営学科 教授 三輪 千年

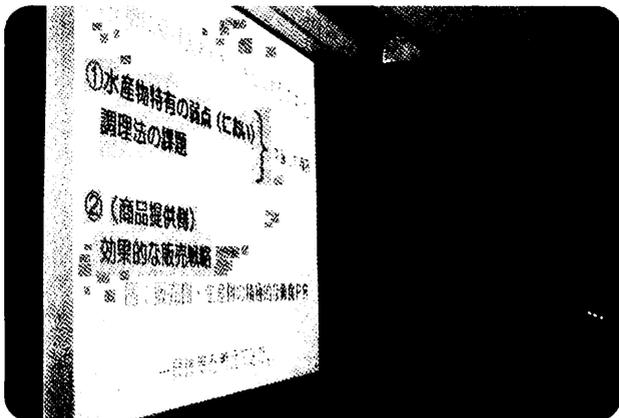
水産情報経営学科は、語学や数学・物理、体育に経済学などの教養科目を教える教養学科を母体に、平成9年、他学科が守備範囲としない水産業の経営や経済、そして水産業に関する情報などを教授する専門学科として誕生しました。当学科の目標は、21世紀の情報化社会に対応した水産業に必要な技術(経営学や経済学、情報科学などの諸学問)を使って日本の水産業を発展させることのできる人材の育成です。

専門学科として出発したものの、水産情報経営学科の専門教育が十分に行える設備が無状態にありました。しかし2年前の平成16年に、学科生が専門に使える演習施設として水産情報館が建設されました。

水産情報館には、農林水産省が日本の水産業に関して行った最近の統計情報資料が蓄積されており、漁業生産や水産物の流通や消費、漁業地域の漁業経営体数、就業者数などの漁業実態を計量的に分析で

きる計算ソフト（独自開発）と情報のデータベースシステムが構築されています。この水産情報館では、水産情報経営学科の学生たちと先生が、情報館に蓄積しているデータを使って課題演習や卒業論文の制作などを行っています。水産情報館の1階部分には、大・小2つの演習室が設けられ、コンピュータの画面が直接投影できるプロジェクターが設置され、卒論発表や研究会発表でのプレゼンテーションが行えます。また、演習室の机にはラン設備が施され、コンピュータ・ネットワーク等の情報機材や視聴覚機

材を用いた講義・演習が対話形式で利用できるものとなっています。2階には4つの教員研究室と研究室に併設した学生用の演習室（8人の学生が利用可能）があり、学生各自が卒論研究とインターネットを使った就職活動が行える机とパソコンが備え付けられています。学生演習室の雰囲気は水産会社のオフィスをイメージした環境に似せて室内をレイアウトしています。卒業後、就職先の企業で当学科で修得した技術や技能が、できるだけ早く発揮できるように工夫をしてみました。



水産情報館での講義風景

就職活動

就職活動で学んだこと

水産情報経営学科 4年 田口 愛

私は約半年間に渡り、就職活動を行なった。当時やりたいことが明確ではなかった私は、とにかく、かたっぱしから気になる会社に足を運んだ。4月頃には、就職活動が日常に馴染み始めた。当たり前のように新幹線に乗り、会社に行き、面接を受けた。しかし面接は何度やっても慣れるものではなかった。自分にとって、個性や長所などを言葉にするほど恥ずかしいものはなかった。その場の雰囲気に馴染めず、簡単な質問にもまともに答えられない不甲斐なさ、面接を受ける度落ち込む、そして反省の繰り返しだった。そんな中、6月上旬、ついに、水産食品関係の会社（株式会社極洋）に「採用です」という連絡をいただいた。ものすごくうれしかった。その瞬間、たくさんの会社が存在する中でこの会社に出会い、採用していただいたことに感謝し、その事実の妙に納得できた。このように失敗続きの就職活動であったが、その中で一番学んだことは、「とにかく行動すること！」それに尽きる。

就職活動に向けて

海洋生産管理学科 4年 藤澤 良介

私は来年度、専攻科へ進学予定です。就職活動が間近の今年度、周囲の4年卒コースの友人達が就職活動を経て希望の会社に内定し喜ぶ姿を見て、「次は自分の番だ」と実感するとともに、焦りも感じる

ようになりました。

来年度に就職活動を控えた自分は今年、「遠洋航海実習」を履修し、今後の就職活動に向けて自身を見つめ直し、考えをまとめるという絶好の機会に恵まれました。この実習は当初の予想以上に厳しく、期間の経過と共に能力等の点で不足している部分などができました。陸上では体得できない船内生活を通じて、周囲の方々へ迷惑となる自らの短所を客観的に把握できるようになってきたと思います。少しは短所が許される学生のうちに、遠洋航海実習等で周囲へ迷惑をかける失敗を繰り返さない様に意識し、能力面で足りない点を向上することが現在の課題です。

今後、遠洋航海実習で学んだ知識を十分に生かして就職活動に備えたい所存です。

就職活動を振り返って

海洋機械工学科 4年 小塚 慎也

私は学校での実験や実習、乗船実習を通じて機械に興味を持ち、機械メーカーに就職したいと思うようになりました。特に乗船実習で多くの水産機械を見て触れたことが大きなきっかけとなり、就職先として水産機械のメーカーを志望しました。

就職活動は当然初めての経験で不安でしたが、先生方や先輩方に様々なアドバイスを頂き、試験対策を重ねて自分なりに自信をつけ、第一志望の会社の試験に臨むことができました。就職試験には筆記試験と面接があり、筆記試験では普段の授業で学んだ

ことや試験対策が大いに役立ちました。また、面接では「元気」と「健康」が強く求められましたが、カッター部で副主将を務めていたこともあって、自信を持って受け答えできました。その結果、内定を頂くことができました。

振り返ってみると充実した就職活動だったように思います。また、サポートしていただいた周囲の方々や勉強とクラブ活動が両立できる水産大学校の環境に感謝しています。

大切な人に支えられて

食品化学科4年 安藤 剛 浩

「なぜ働くのか？」一年前の私はそんなことばかり考え、「そんないい加減な自分が果たして就職できるのか？」そんな不安を抱いていました。

考えるよりも行動しようと、大阪や東京まで何度も足を運び、できるだけ多くの会社の説明会に参加して面接を受けました。実際に会社の人と話しをするのは初めての経験であり、刺激的でした。しかし思い通りにはいかず、立て続けに不採用の通知が届いたときは本当に心が折れそうでした。

それを乗り越えることができたのは周囲の支えでした。素晴らしい友人、先輩、先生、そして両親に恵まれ、励まされ、まるで自分のことのように親身に相談に乗ってくれたおかげで自分を立て直すことができました。自分は何ができて何ができないのか、そういったことを具体的に伝える事ができ始めた頃、理研ビタミン株式会社から採用通知が届きました。

今、就職活動を振り返ってみると辛い、苦しいことをバネに自分が大きく成長した期間であったと同時に、周りの人達の大切さを再認識できた期間でもありました。

公務員受験に思うこと

生物生産学科4年 新川 貴 史

私にとって、水産研究施設において研究に携ることが昔からの夢で、水産の専門的な知識を身につけ

ようと思い、水産大学校に入学しました。実は、他の大学も受験したのですが、不合格でした。大学生を送る中で、不合格であったということが心のどこかに引っ掛かっていました。学年を経るごとに一度受験に挑戦したいという気持ちが強くなり、公務員試験受験に挑戦することを決めました。周囲の人が次々に民間企業から内定をもらい、就職活動を終了させていく中で、試験勉強を続けるのはとても辛かったのですが、4年前の悔しさがあったからこそ耐えることができたのだと思います。受験勉強の際には、試験に合格するために頑張るのではなく、就職した先にある目標に近づくために努力するという意識を持ち続けるよう心がけました。自分の将来に対する意識が、自然と面接官に伝ったのかもかもしれません。長崎県職員採用上級試験に合格という形で自分の夢にまた一歩近づくことができ、非常に嬉しく思っております。

練習船に就職が決まって

専攻科 小勝 正 貴

ふう！ 内定の言葉を頂いて、つい口から出てしまった。悩み、決断し、そして勉強してきた長い道のりを思い出したからだ。就職について考え始めたのは4年の初めであった。官庁船か商船のどちらに進むか悩んだ。船員の求人も多くなり、大手商船も不可能ではなかったからだ。だから悩んだ。練習船も視察したし、会社のインターンシップにも参加した。決め手は水産大学校で学んだ自分が「今ここにいる」ということだった。そして水産業に貢献したいという気持ちで水産庁に行こうと決めた。それは遠洋航海に行く前だった。遠洋航海から試験対策を始めた。専攻科になると周りが就職活動を始め、内定する者もいた。正式な求人がきたのが5月、それまで不安で勉強しても頭に入らない時間もあった。残り試験までは練習船の皆様のご助力もあり、努力が実る結果となった。練習船に乗り込むに当たっては、自身の船員としての成長と、恵まれた船の教育環境を十二分に活用した水産大学校特有の人格を培う船上教育を模索していきたいと思っている。

大 学 祭

'06海燕祭を振り返って

'06大学祭実行委員長 (生物生産学科3年) 松崎 季 炯

私たち大学祭実行委員が活動を始めたのは4月。今年のテーマとサブタイトルを決めることから始めて、新入生からも2・3年生からも面白い意見が出ましたが、ここは、少し真面目に「Big Wave〜この波を逃すな!!〜」に決めました。これは、私達の興すエンターテイメントの波を一緒になって楽しんでもらおうとの思いからこのテーマになりました。

水大がどのような研究をしているのか知ってもらいたくて、昨年同様教職員による公開講座を1日目

に企画し、水産業の現場で話題のクラゲをテーマに講演があり、講演後にはクラゲ食品の試食会もあり大盛況でした。2日目には、恒例となっている吉本興業のお笑いライブで、たくさんの来場者の皆様に楽しんで頂くことができ本当に嬉しかったです。

今年度は新企画として小・中学生を対象に「宝探し」を企画しましたが、準備不足のため学内各所に足を運んでもらうことが、充分でなく残念でした。

研究室公開、講演会と先生方や先輩の皆様のご協力があったからこそ海燕祭が開催できたスタッフ一同心から感謝しています。

これから大学祭実行委員は地域の様々な祭典を体験し、個々が成長していくと思います。そして、来年の海燕祭も成功させることができるように、これらの体験を活かして欲しいと思います。

学生部だより

学生部長 前田 和 幸

水産大学校はその前身を含めると60年余りの歴史を持ち、約8000人の卒業生が水産及びその関連分野で活躍しています。今回からシリーズで、各界で活躍する卒業生の紹介を行います。第1回目として、水産庁で活躍するお二人に、現在の仕事内容と水産大学校で過ごした4年間の思い出を綴っていただきました。文中にもありますように、豊かな自然と充実したカリキュラム・設備に恵まれ、皆すばらしい学生生活を満喫して、社会へ巣立っています。

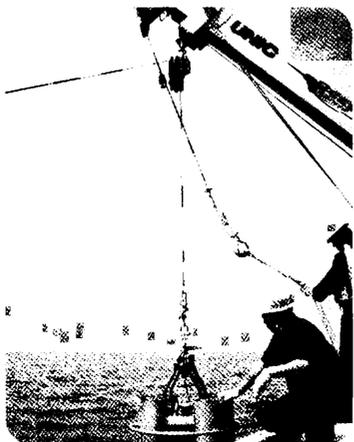
日本の水産業に貢献する機関士

機関学科45期卒 山 西 大

私は、平成7年3月に水産大学校の機関学科（現海洋機械工学科）船用機関学課程を卒業し、同年4月、神戸商船大学大学院（現神戸大学海事科学研究科）に入学しました。そこでは、主に船舶用ディーゼル機関の燃焼と排出ガスについての研究を行いました。修士課程2年で就職を決める際、いろいろな船舶用エンジンについてもっと追求したくなり、船舶に関する国際的な資格が取得できる水産大学校の専攻科に入学しました。その理由は、特定のエンジンメーカー等に就職すると一生を通じてその会社のエンジンにしか係ることが出来ませんが、船舶の機関士になるといろいろな種類のエンジンや船用機器に係れるだけでなく、水産・海洋に関する国際的な調査にも携わることができるからです。

専攻科では前期（4月～9月）に赤道付近までの航海を含む乗船実習が行われ、後期（10月～3月）に大学校内で講義が行われます。私は講義期間中に、海事関係の国際的なライセンスである、三級海技士（機関）、二級海技士（機関）、一級海技士（機関）の筆記試験に合格しましたが、スタートが遅かったため勉強時間と受験回数が限られ苦労したことを覚えています。しかし最初から専攻科を目指す場合、大学校では3年生の後期から受験指導が行われていますので、4年生の7月に実施される試験で一級海技士の筆記試験に合格する人もいます。

平成10年3月に専攻科を修了した後、海洋科学技術センター（現海洋開発機構）から船舶の運行管理業務を委託されている日本海洋事業（株）に就職しました。最初は海洋調査船の機



スベードコアラー採泥器による調査

関士として乗船しましたが、途中から有人深海調査船や無人探査機などを操作して調査を行う「運航チーム」という部署に転属になりました。「運航チーム」の一員として「H-2ロケット」や「えびめ丸」の調査等にも参加することができ、非常にやりがいのある仕事でしたが、水産大学校の本科、専攻科で学んだ知識や技術をより生かせるような仕事がしたいと考えていました。そんな時、水産庁の船舶職員募集を知り採用試験に応募したところ、幸運にも合格し水産庁に入庁することができました。もともと水産に興味があった私には願ってもないことでした。

入庁後の最初の一年程は乗船する船舶が特に決まっておらず、各地に配属された漁業調査船や漁業取締船の応援や交代要員として乗船しました。そして平成17年4月より現在まで、新潟市にある(独)水産総合研究センター 日本海区水産研究所所属の漁業調査船「みずほ丸」に乗船しています。調査海域は北海道西部から九州の五島列島付近までの日本海の全域で、新潟近海でよく捕れるアカアマダイやハタハタを始め日本海全般で捕れるスルメイカやズワイガニなどの幼生調査を中心に行っています。また、最近では全国的に問題となっているエチゼンクラゲの調査も実施しています。

漁業調査船を運航するという事は、ただ船を動かすというだけでなく広大な海域から調査点に確実に到着させなくてはならないし、観測時刻も決められる場合もあるため、正確な操船技術が求められます。また運航は天候や海況によって大きく左右される上に、調査日数が限られているため時化の中でも調査・観測が実施されることもあります。このように調査船が確実に安全に運行できるように、私は機関室において、機関の運転や保守管理・整備を行っています。しかし、調査によっては甲板上に出て応援を行う場合もあります。機関士の私が甲板作業もできるのは、水産大学校の練習船での実習経験が生かされているからだと思います。また、トロール等の観測や調査ではサンプル以外の魚が捕れる事もあるため、いろいろな種類の魚を目にすることができたり、調査によってさまざまな港に入るため、色々



エチゼンクラゲ調査

な上地に上陸できること等の漁業調査船ならではの楽しみもあります。漁業調査船は、運航の正確さや調査の確実さという点において神経を使いますが、それだけに全調査行程が終了した時の充実感は何とも言えず、これらの調査結果が日本の水産業に大きく貢献していると思うととてもやりがいのある仕事です。

学生生活は人生の中でほんのわずかな時間ですが、そこで学び感じたことはこれから先、生きていく上で大きな影響を与えてくれると思います。下関という海や山に囲まれ恵まれた環境の中で大いに学び、いろいろな経験を積み重ねていって下さい。

水産をめぐる状況と水大生に 求められるもの

—水産行政に携わる卒業生の視点から—

生物生産学科53期卒 飯田 健

1. はじめに

平成15年4月に水産庁に入庁、卒業から4年近く経ちますが、今でも水産大学校の生活を鮮明に思い出すことができます。それだけ私にとって大学校生活は充実したものでした。

振り返れば水産大学校でなければ体験できないばかりの学生生活を送っていた私が、水産庁職員の視点から水大生に求められるものについてお話したいと思います。

2. 大学校時代

入学の為、吉見駅へと向かう山陰線の車窓から海が見えたことに心躍ったことは、鮮明な記憶として残っています。東京近郊で育ち、10歳から釣りを趣味としてきた私にとって、海が近くにある環境で生活を送ることができることが現実のものとして実感できた瞬間だったからに違いありません。

平成11年4月に入学、生物生産学科に属し、魚も海も好きな私にとって、入学したい学校で勉強したい学科を専攻できた学生生活は、まさに水を得た魚のようでした。

学生寮で生活し、サッカー部に所属、大学祭実行委員の活動を行い、苦難と愉楽を通じて無二の親友ができたことは、今でも私の宝です。

就職先は水産系と決めていたことから、就職選択参考の為、南風泊市場、海響館（水族館）等の魚に関するアルバイトに従事しました。

結局、高校時代に施設見学した県の水産試験場で行っている魚介類種苗を生産・放流し、水産資源増殖の仕事を通して世の中の役に立てればとの思いから、公務員試験勉強に取組み、結果、水産庁採用となりましたが、日本の水産の将来の為に仕事ができる事に魅力を感じ、今でも水産庁職員となれたことに対して心から良かったと思っています。

3. 水産庁の仕事

役所の権限は『法律』と『予算』を所管していることです。これらに基づき、国会対応、法令立案事

務、予算事務、会議運営、報告書作成、広報等の業務を行っています。

入庁当初は、釣船業者の事業に対して必要な規制を行い、利用者の安全等の確保に資することを目的とする法律の所管担当となりました。釣りの知識は備わっていたものの、法律の読み方、解釈の仕方に苦労した事を覚えています。

その後、15ある水産庁各課へ作業割り振りを行う水産庁の窓口業務を担当し、作業を振る手順や、取りまとめた内容を上司に伺う際の説明責任の重要さを経験しました。この仕事を通じ、水産庁全体の業務を俯瞰できたのは良い経験となっています。

現在は、水産研究・技術開発に関する企画調整として予算事務等の担当となっています。

仕事上の不明点等は、直属の上司に相談できますが、多岐に亘る業務内容について独自に勉強していく姿勢が随所に求められます。

多忙な程の業務量をこなす必要がある一方で、多くを学ぶ機会があることは役得と考えており、やりがいのある仕事と感じています。

4. 水大生に求められるもの

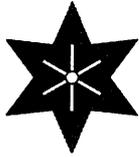
テレビや洗濯機のように、身の回りの物が自動化し、考えることなく簡単に物事が動いてくれますが、社会では何でも簡単に物事が進むわけではなく、問題解決のマニュアルも存在しません。解決したい事は何かを明確にし、現在の状況や問題点を洗い出し、解決に向けた取組みを考えて行動に移していく。この一連の作業が社会では求められます。その為、水大生には、自分の考えを持ち、自ら考えて行動できる人となっていただきたいです。

水産大学校は、海等の自然環境を生かしたカリキュラムや、小規模だからこその学生と教官との関係が密な教育の実施等といった恵まれた教育環境があります。また、部活動、サークル活動、アルバイト、趣味等からも様々な事を学びとれます。水産大学校で過ごす学生生活には多くの事を感じ、考える機会があるので、積極的に体を動かし、考えて行動する意識を培っていただきたいと思います。その中で自分の将来についても真剣に考えていただきたいと思います。

将来の水産業を担う水大生に心からの期待を込めて、本文を終わりとします。



水産庁増殖推進部研究指導課にて



水大学園だより

独立行政法人 水産大学校 〒759-6595 下関市永田本町2丁目7-1 電話0832(86)5111
[発行] 学生課 ホームページ <http://www.fish-u.ac.jp>



水産大学校における新しい教育の兆し

校長 本村 紘 治 郎



平成19年度の入学式は例年より5日早い4月4日に行われ、187名の新生を迎えました。今年度から、前期の授業と試験を終えて夏休みに入ることとしたため、入学式や在学生の前期授業開始が従来より早くなっています。

この時期、学生生活への希望と期待に加えて一抹の不安と緊張感のある新生や、勉学への更なる意欲を生き生きとした表情で示す専攻科生、研究科生を目の当たりにしますと、彼らを社会に貢献できる有能な人材に育て上げる責任感と使命感を改めて強く感じます。

水産業を担う人材の育成という本校の設置目的に従い、本校の教育は水産業界の現実的要望に応える必要があります。200海里時代に入ってから水産業界は変貌し、一時は衰退とまでいわれたことがありましたが、人類に海から食料を供給する水産の根本的意義が変わるところはありませんし、また、健康的で安心・安全な食料の供給という点では水産と水産教育の重要性は益々増大すると考えています。

そういったことから、本校ではこの度、水産業界の実状を念頭に、水産情報経営学科において新たに水産流通分野の教育強化を図ることとしました。当該学科のカリキュラムは平成20年度改正の予定で、学科名称は水産流通経営学科に変更されます。これに併せて、本校の設置目的に沿う更なる効果的・効率的な高等教育に向けて、共通教育科目、専門教育科目の全般的な見直し作業も進められ、20年度以降は整理された新しいカリキュラムになります。

本校における実験実習を重視した、所謂、実学

教育に必要な教育設備の充実は順調に進んでいます。本年6月29日(金)に先端機器を備えた新鋭練習船耕洋丸(2,352トン)が三菱重工業下関造船所で竣工し、入魂式及び引渡式が行われました。名実共に本校の貴重な財産となり、実学教育とフィールド研究に練習船の今後の活躍が大きく期待されることです。また、学生教育の本場である建築中の講義棟は今年度末に竣工の予定で、カリキュラム改正とあいまって20年度からは益々充実した教育の実施が可能となります。

ところで、本校の大きな特色である海技士教育において、三級海技士の資格取得に関しては本校を中心とした水産系教育機関の尽力と関係官庁のご理解により、平成18年度専攻科修了生から2月口述試験(国家試験)の受験が可能となりました。このことは専攻科学生の就職活動に対し、大きな効果を与えています。

これまで、三級海技士の口述試験は専攻科修了後の4月以後でなければ受験できなかったことから、官公庁や企業によっては採用日を4月の口述試験の合格後に設定していました。そのため、専攻科修了直後の4月1日付け採用にならないことがありました。また、採用対象者を4月1日現在で海技資格所有者に限定された場合には、採用試験を受けることができませんでした。今回の努力により3月末の海技資格取得が可能となり、4月1日付けの入庁・入社・採用に対応できるようになったことは専攻科学生の就職支援の面で大きな快挙といえます。

本校の存在意義は、近年、目覚ましい発展を続ける水産の知識と技能を教授する一方で、水産界の厳しい現場の環境に耐え得る強い精神力と体力を養わせ、この両者をバランスよく兼ね備える調和のとれた人材を育成して社会に輩出することにあります。本校では常にこのことを自覚して自己による教育点検・改善・自助努力を弛まず続け、水産に資する人材の育成に努力することにより本校の社会的評価は一層高まると考えています。

最近の話題

新耕洋丸試運転

耕洋丸船長 田 淵 清 春

5月9日早朝、朝陽を白い船体に浴びて三菱重工(株)岸壁を離岸し、関門海峡に入航、西口に向かいました。いよいよ公試運転前の海上予行運転が始まり、この航海が新装成った耕洋丸にとって、正に初めての船出となりました。濱口委員長他、建造委員、乗組員、造船所及びメーカー関係者など、約100名を乗船させて関門海峡を抜け、六連島航過後、

蓋井島西側にて、これから4航海、18日間に渡って実施される約130項目の最初の試験項目である磁気コンパス修正が行われました。

5/9~5/14の一回目の航海では主として海上公試運転の予備試験とも言える予行運転が行われ、漁業機器、機関関連機器、航海計器、舵機、漁具、造水装置などを稼働させ、不具合の有無がチェックされました。

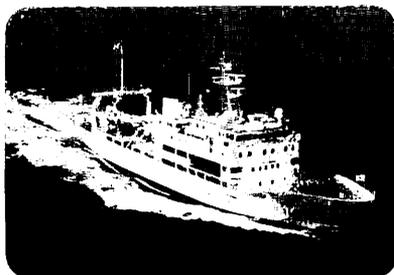
5/14~5/17に行われた二回目の航海では海上公試運転の主要試験項目の一つである速力試験が快

晴の下、蓋井島沖で行われ、主機関出力2/4負荷で15ノットを超え、建造仕様書に記載されている「航海速力14ノット以上」という条件を余裕を持って満たし、3/4負荷では空船とはいえ、17ノットに迫る速力を記録し、「試運転最高速力約16ノット」の条件も満たしました。また、漁業調査時に使用する補助推進電動機速力試験も行われ、67%負荷で7.7ノット、100%負荷で9.8ノットの速力を確認しました。その他、惰力試験、旋回力試験、バウスラスタ試験など一連の試験が実施され、基礎的資料を得ると共に減揺装置試験、船体部局部振動計測、騒音計測、航海計器類・漁業観測計器類・照明機器類・気象観測装置作動試験を行い、騒音計測で一部計測値が目標値を上回る箇所がありましたが、その他の試験結果はすべて“良”と判定されました。

5/21～5/25の三回目の航海では自動船位保持装置(DPS)調整、計量魚群探知機較正を行いました。STNS(セルフトロール&ナビゲーションシステム)を実施する上に置いて主要な役割を果たす機器であるDPSは3日間を費やして主機関及び推進電動機を使用した場合について昼夜実験が行われ、基礎データであるパラメーターを求めました。計量魚探較正は夜間及び早朝に行われ、他の音響機器の音波が当機に与える影響が慎重に計測されました。また、前航海で十分な結果が出せなかった漁具動態監視装置及び漁具位置測定装置について再試験が行われ、ほぼ良好な結果が得られました。

最後の公試運転航海は豊後水道及び鹿兒島沖にて5/27～6/1に実施されました。計量魚群探知機、潮流計、超音波海底地形探査装置の水中雑音計測、潮流計、超音波多層流速計の最大海底探知深度確認試験、超音波海底地形探査装置の最大測深深度確認試験を実施するとともに、CTDウインチ(5000m)、観測用ネットウインチ(1500m)、海洋観測ウインチ(5000m)、ワープウインチ(3500m)のアーマードケーブル、ワイヤー、ワープをそれぞれ全部繰り出し、燃り取り及び巻き直しを行いました。また、CTDオクトパスシステムの作動試験などを実施し、予定されたすべての試験を終えました。

今後、竣工後に漁労設備の作動試験及びSTNSの試験が東シナ海にて7月、8月に実施される予定です。



① 試運転中の新耕洋丸

② 試験風景



萩市で行われた「水産経済・流通調査」 水産情報経営学科 教授 三輪 千年

昨年の9月28日から30日の3日間、水産情報経営学科の4年生を対象にした「水産経済・流通調査」が山口県萩市で行われました。一日目は、昼に萩の市役所前に現地集合し、直ちに、萩市水産課で本校卒業の貞光水産課長より「萩水産業の概要」についての説明を受けました。その後、山口県漁協の越ヶ浜支店に行き、漁協の役割などの説明とともに、漁業者から直接、漁業の苦労話を聞きました。二日目は、早朝4時から萩地方卸売市場の見学を行い産地市場の実態を学びました。引き続いて、山口県萩水産事務所で、睡魔に襲われながら本校先輩の中村所長から県内漁業についての説明を受けました。昼食は、産地市場脇にある道の駅「萩しーまーと」で摂り、食後は、中澤さかな駅長から地元水産物を販売する「しーまーと」の「地産地消」戦略などを伺った。午後からは、漁協・須佐支店に移動し、漁業者からケンサキイカのブランド化について話を聞き二日目は終了。三日目は、連絡船に乗って萩大島に行き、漁協で漁業の話を聞き、島内の散策などを行った後に、現地解散し、一連の実習は無事終えることが出来ました。

学生の反応は、始めは控えめでしたが、時間が経過するうちに、実習でありながら“修学旅行”の様相となり、うち解けてきました。漁業者や漁協の人たち、行政に携わる人たちから直接生の声が聞け、それまでの大学での講義とは違った知的興奮があったようです。また、“しーまーと”での食事や、旅館で地元の魚を食べる経験を通して、多くのことを学習したと思います。実習後のレポートを見ても、水産業の現場を体験した喜びの声が多く寄せられています。

これまで選択科目だった当調査実習は、平成19年度からは3年生の必修となり、これからもより多くのことを学生諸君が学んでくれることを期待しています。



③ 萩市役所で貞光水産課長から説明を受ける

米国マサチューセッツ大学客員教授滞在記 海洋生産管理学科 教授 濱野 明

大学の国際化が叫ばれて久しい。大学における真の国際化、また国際競争力のある教育・研究環境を実現するためには、水産大学校はどのような特色ある国際戦略を打ち立てなければならないのか？ また新たな21世紀で、農林省水産講習所以来の戦後レジュームから脱却して、世界的視点を有した

教育・研究機関としてその社会的機能を果たすにはどのようにしていけばよいのか？このような「青臭い」ことを吉見の小さな研究室で常々考え、いつか世界の大学の実態を自分の目で見ることができればと願っていた。「求めよ、さらば与えられん」まさに、奇跡が起こったのである。

私の博士論文の指導教官であった石井丈夫先生（東京大学名誉教授）と旧知の仲であるマサチューセッツ大学のRothschild教授にお会いしたのは二度目のAberdeenでのICES国際学会であった。学会では日本での研究のこと、自分の大学の研究のことなどコーヒープレークのたびに教授と話し、私の教え子である東大大学院博士課程在学中の田上君（海生51期）と一緒に盛り上がった。帰国後、教授と何度かメールのやり取りをする中で、“Why don't you work with us?”というなんとも理解しがたいメールが舞い込んだ。この一言から昨年の6月から9月までの3ヶ月間、ボストンから100 km南のNew Bedford市にあるマサチューセッツ大学ダートマス校海洋科学技術大学院で客員教授として滞在することになった。

マサチューセッツ大学Dartmouth校は1895年に開校された州立大学で、私が所属していたUMASS Dartmouth S Mast (School for Marine Science & Technology, University of Massachusetts Dartmouth) はメインキャンパスから少し離れた海に面した場所にあり、教職員を含め総勢100-110名規模の大学院生が主体の大学院教育と研究所を兼ね備えた組織である。

私の仕事はRothschild教授が抱えているプロジェクトの一つである「ソナーと水中三次元カメラを用いた底魚資源の評価法」の開発チームの一員として、チームリーダーである新進気鋭の女性研究者（ハーバード大OG）を補佐するような形で参画すること、さらに、大学院の博士課程の学生に対するセミナー、SMAST職員向けの特別セミナー講演である。加えて、このプロジェクトはNOAA（米国大気海洋局）から予算が出ていることからテクニシャン2名も配置されており、新しい取り組みに対する意気込みが感じられた。このプロジェクトの一環として私もWoods holeにあるNOAAの研究所で若い研究者を対象にセミナーを担当する羽目になり、彼らの早口で矢継早の質問に、私の語学力で、対応するのにずいぶん苦労した。

一方、私の立場は客員教授であることから、職員の立場からアメリカの大学の様子を垣間見ることができた。私の印象としては、UMASS Dartmouthの大学運営はトップダウン方式であること、組織のヒエラルキーが厳然としてあること、Faculty、すなわち大学の正規教員になるためには多くの関門を乗り越えなければならないこと、またProfessorまでのプロモートがかなり厳しいものであるというものであった。特に印象的だったのは、プロジェクトが終われば、研究室が解散させられ、2-3日で人も含めて、部屋ごと入れ替わってしまうような厳しい現実がそこにあった。アメリカの大学における研究はFacultyである正規の教員以外に、Research Associate, Research Assistant, Research Technician, ポスドクがあり、さらに大学院生を加えた陣容で実質的な研究スタッフを構

成している。研究の進め方も、実験をする人、データ解析担当、論文を取りまとめる人、プロジェクトの予算を獲得してくる人（これは主に教授）と、その役割分担がきちんと仕分けされており、その調整をチームリーダーと教授が行うというものである。Rothschild教授はいくつもプロジェクトを持っているため、チームリーダーである、Dr.Olds女史からの報告を受けつつ方針を示すという進め方のようであった。

また、大学の役割のひとつとして産業界や地域社会への貢献という点では、見習うべき点が多々あった。アメリカではTax Payerに対するサービスは当たり前のようにとらえられており、漁業者への安全講習に大学の水槽実験施設を潜水訓練用に提供することや、高校生自らが行うセミナーへの支援と発表会の開催、さらに野外音楽会や夏の独立記念日の花火大会にキャンパスを開放するなど、大学が地域を代表するアカデミックセンターとして位置づけられているという印象を持った。

アメリカの大学、特にしのぎを削る東部地区にある有名大学と水産大学校とを直接比較はできないにしても、いずれは水産大学校も「知」の世界大競争の荒波にもまれる時期がくるであろう。これら一連の大競争化の流れの中で、地域が誇る教育機関として存在するためには何をなすべきか？水産大学校が特色ある国際戦略を打ち立てるためにはこれからどのような取り組みが必要であるのかが今まさに問われていると言っても良いだろう。

アメリカニューイングランド地方の初夏はさわやかで、森を散策中、IVYのつたにかぶれ、下宿のPaulineおばさんに心配をかけた日々が懐かしい思い出になってきた。

最後に今回の「奇跡」の実現に際して、ご理解、ご高配を頂いた藤理事長、及び教職員の皆様、また海洋生産管理学科の先生方に深甚なる謝意を表したいと思います。



① マサチューセッツ大学ダートマス校キャンパスにて

人と機械と水産と

海洋機械工学科 准教授 中村 誠

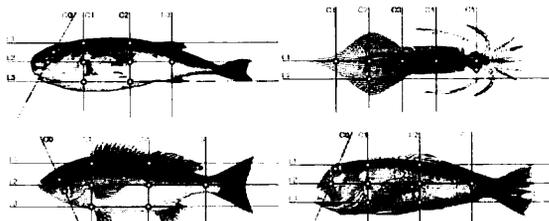
水産物の流通経路は、例えば近海物では、生産者→卸売市場→小売店（含む、量販店）→消費者、というように各過程では必ず人（の手）が介在します。さて、この経路をみてみますと、各所の水産物は特に卸売市場に集中する仕組みになっています。よって、長年市場で働く「競り人」は豊富な経験を背景として水産物の品質を鑑定する能力に長けており、所謂「エキスパート」や、文字通

りの「目利き」として見なすことができます。「鮮魚を見て即座に品質を見抜く能力や知識」、これを上手に競り人から引き出し、解析してモデル化ができれば、流通上での水産物の品質管理の強化に利用ができ、非常に有用なものになります。同様に、消費者側では携帯電話や昨今普及が進む可搬性の高い小型ゲーム機の表示機能等を利用して、店頭に並ぶ鮮魚の品質の程度を「目利き」のレベルで見定めることも可能となります。

特定の個人がもつ知識を引き出す作業を知識抽出と呼び、抽出した知識を表現（モデル化）、利用する作業を知能情報処理と呼びます。私たちは知能情報処理に関する技術・理論を用いて、人と同等の処理が可能な機械や装置の研究開発にトライしています。具体的には、「鮮魚の熟練的品質評価の解析とソフトコンピューティングによるモデル化に関する研究」という科学研究費補助金採択課題を掲げて、地物の鮮魚に対する競り人の評価の解析とモデル化を行っています。この研究は、鮮魚の扱いで定評のある山口県漁協萩地方卸売市場（藤田市場長）と特牛魚市場（矢田市場長）、及び魚肉の生化学的分析では本校の食品科学科（原田和樹先生、前田俊道先生）との全面的な協力を得て行っております。因みに対象魚にはアマダイ、イサキ、サバフグ、ケンサキイカ等を設定しており、設計したモデル（統計モデルとファジィ推論モデル）での正答率（競り人の品質評価に対してモデルでの推定結果が一致したもの）は各魚種とも90%を超えています。

さて、水産業には人の技に依存するところが多く、わが国の伝統的な魚食文化を守るためには人の技の機械化のみならず、現場の活性化につながる「目利きのマイスター（Meister）制度の導入」などの施策についても、真剣に議論しなければならない状況であると思われます。

最後になりましたが、生産の段階では漁船や養殖機械、漁獲物の加工には水産加工機械など、安全で高品質な食品を効率よく流通させるためには機械システムが必要不可欠です。勿論、これらを生設計・開発する人、操作する人も必要です。本学科ではこのような社会的要請に応えるため、教育と研究を介して優秀な人材を育成するよう絶えず努力をしております。お陰様で就職も非常に良く、卒業生も広い分野で活躍しております。今後とも宜しくご支援を賜りますようお願い申し上げます。



食品科学を学ぶ1年生にユニークな授業を開講

—魚餐の科学と文化—
食品科学科 教授 福田 裕

食品科学科では、1年生を対象にユニークな授業を始めました。魚食の文化や科学を心から愛し、水産加工、漁業などを生涯の仕事として取り組んで

いるプロ中のプロをお招きして、生きた実業を講義していただく「魚餐の科学と文化」です。

一回目は、下関市の株式会社なかお（代表的フグ仲卸）の社長中尾隆之さんから「包丁の科学とふぐの文化」について講義して頂きました。講義では、日本料理の和包丁について魚種と用途に応じた使い方を実物で説明され、ふぐのさばき方の実演では、その見事なプロの技に学生から感嘆の声が上がりました。次に学生たちは中尾さんの指導で、初めてトラフグをさばき、湯引きのたたき風刺身とフグ鍋をつくり、「高級なトラフグを食べられて幸せ、水産大学校に入学して良かった。」と話してくれました。この春に期待と不安を持って入学したばかりの学生たちに自信が漲ってくるのが、眼の輝きと紅潮した笑顔から感じ取ることができ、教員にとってもうれしい瞬間でした。

2回目は、下関市の彦島シーレディーズ代表の廣田郁江さんから「漁師の母ちゃんの生きる道」と題して、ご自身の体験を通して漁業経営における女性の重要な役割を講義していただき、漁業は厳しい中にも経営努力次第で魅力的な産業であることを学生たちに知ってもらう良い機会となりました。3回目は、山口県長門市にある我が国有数の練り製品メーカー「フジミツ株式会社」の社長藤田雅史さんから「蒲鉾の文化とビジネス」と題して、ヒット製品「チーズコロン」の開発の経緯などについて講義していただき、ビジネスの厳しさと面白さについて学生たちは身を乗り出して聴いていました。4回目は、山口県うに協同組合理事長の嶋田達雄（下関水産物産株式会社社長）さんから「ウニ加工の歴史と技術」と題して、全国至る所で生産されるウニを山口県が全国一の生産県にした発展の歴史、その加工技術、及び組合の活動などについて講義していただきました。5回目は、水産大学校の卒業生の下関市卸売市場主任の吉原裕滋さんから「セリを通して学ぶ魚市場の役割」と題した講義後、学生にセリの方法について指導、学生はケンサキイカとイサキを競り落とす模擬セリを体験しました。6回目は、7月11日に、下関くじら文化を守る会の会長和仁皓明さんから「鯨の食文化を守る」と題して講義していただきました。

水産大学校では、今後とも「魚餐の科学と文化」の様な魅力ある講義の充実を図り、水産業をリードできる人材の育成につとめたいと努力しておりますので、ご家族の皆様の温かいご支援とご協力をお願い申し上げます。



①トラフグの刺身を造っているところ

生物生産学科の近況

生物生産学科 教授 山元 憲一

生物生産学科は、資源生物学講座、資源環境学講座、資源増殖学講座で構成し、資源生物学講座では、水産上重要な種の生理・生態を明らかにしてより効率よく増養殖を進める上での基礎知識を蓄積し、あわせて、未利用な種の水産資源としての利用を可能にする基礎研究に取り組んでいます。資源環境学講座では、沿岸域および陸水域での水産上重要種の生息環境についての研究、特に藻場・干潟の保全に関しては基礎研究からその具体的方法の提言までを目指した研究に取り組んでいます。資源増殖学講座では、遺伝子解析の手法からの優良品種の策定に関する研究、養殖施設はもとより近年問題になってきている自然界で発生する病害に対する防疫に関する研究に取り組んでいます。

更に、今年4月からは、田名臨海実験実習場から半田教員が、小野臨湖実験実習場から高橋教員が生物生産学科の一員として配置換えとなり、加えて海苔を中心とした海藻のバイテクに関する研究を続けてきた水上教員を退職後も引き続き特任教授として加わっていただき、総勢17名で教育・研究の充実に努めております。一方、両実験実習場に関しては、昨年までは助手1名を中心として場長

の下で管理運営してきましたが、現在場長を中心として生物生産学科教員16名が一丸となって本校の学生に対する実習(年5回)および学内外からの調査・研究の要望に対応してゆくように体制を整え、本校教育の趣旨である実学教育の充実・強化に取り組んでいます。

今年度からは、7月中に3年次生の各研究室への配属を完了させ、3年後学期開設の「増殖学セミナー(1単位、選択)」を行うと同時に卒論研究に取り組ませ、3年前期までに修得した生物生産に関する専門知識に加えて、各研究室で行っている調査・研究を通して各学生の希望に添った研究分野に関するより高度な専門知識を修得させるように配慮しています。



田名臨海実験実習場

小野臨湖実験実習場

在校生の声

新たな土地、人、そして決意。

水産情報経営学科1年 赤井 宣子

私がこの学校に来て、最初に驚いたのは辺りの景色の良さでした。今までテレビや雑誌でしか見たことがなかったような風景のなかに自分が立っている。それがとても不思議で、新鮮でした。学校の前にはただ海が広がっていて、ビルも都会の喧騒もない世界。「ああ、これからここで生きていくんだ」と何度もその景色を見て思いました。

そして次に驚いたのが、此処の人たちの人間性。この自然の中で生きているからなのか、みんな遅く、積極的で、本当に生き生きとしていて、「ああやっぱりこういう所に住んでると変わっていくんだな」と感じました。

これから4年間ここで世話になります。とても良い環境に恵まれたこの学校で、勉強はもちろん、今この大切な時間にしか出来ないことを色々やってみたいです。そして4年後、此処を立つ時に「この学校に来て本当に良かった」と胸を張って言えるように努力していこうと思います。先生方、先輩達、そして同級生の皆さん、よろしく願います。

この頃

海洋生産管理学科2年 酒井 啓佑

高3の夏のオープンキャンパスで一目惚れし、この学校に行くことを決意した。初めは変わった学校なのかと思っていた。しかし、入学してみると普通に楽しく、気付けばもう2年生になっていた。初めての一人暮らし、新しい出会い、さらに釣

りやり放題とかなりエキサイティングな日常だった。いろいろな部活にも入り健康も維持。

最近授業をまじめに聞いてみると、面白い内容や人生で役立つような授業が多いことに今頃気付いた。特に専門教科は面白い。これからは興味のある授業はちゃんとまじめに受けようと思う。

大学生になり自分のことは自分でやる生活を送り、自分の行動の責任、人とのつながりの大切さを実感している。近頃は自分が大人に近づいているんだなあ、と感ずることがある。まあ自画自賛ではあるが。水産大学校に入ってよかったと思っている。これからもこの大学でいろいろなことを学び、残りの大学生ライフを楽しんでいきたい。

海機の魅力

海洋機械工学科3年 前田 大輔

私が在籍している海洋機械工学科は他の大学、学部と違った特色がありとても魅力的で毎日がとても充実しています。高校のときに知合いに進められ入学しましたが現在は海洋機械工学科に入学できて良かったと思います。中でも一番の思い出は2年生の12月に体験した乗船実習です。初めて船内での団体生活は大変なこともあったけど、たくさん勉強になることもありました。普段見ることのできない機関室やデッキの見学、工場見学、船内での様々な講義など、座学では学べないようなことばかりでした。

8月からまた乗船実習が始まります。2年生の実習では船について基本的なことを学びました。そのときの体験、知識を活かして、今回、新たに体験する当直や海洋調査などの船内作業に役立て

たいと思います。航海期間は1ヶ月と少し長いので不安もありますが、乗組員、指導教員の指導をよく聞いて、海洋機械工学科3年生の見事な団結力と協調性を発揮し、無事乗船を終えて、今後の学校生活、就職活動に活かしていきたいと考えています。

水大ライフ

食品科学科1年 川崎 寿 広

もともと海が好きであった私は、高校の時から何か水産に関わる大学に行きたいとずっと思っていました。そこで、いろいろと水産系の学科がある大学を探していたのですが、もともと日本中でも少ない学科なので、かなり苦労しました。そして、見つかったかと思えば、海からかなり遠く、特に実習の無い、半ば詐欺ではないか？とも思える大学ばかりでした。そんなふうに進路決定に苦しんでいた私に、高校の担任の先生に水産大学校を紹介してもらいました。

そして私は、オープンキャンパスに参加しました。特に将来のビジョンがなかった私は、なんとなく食品科学科を覗いてみました。おもしろい教授や先輩たちがいて、とても雰囲気良かったので、食品科学科に受験を決め、それまで全然やっていた勉強を頑張り、推薦入試を受け、入学することができました。

このようになりかなり奇跡的に合格することができた私ですが、今は受験勉強の苦しさなど忘れて、楽しい水大ライフをおくっています。海や自然に囲まれてとても居心地がいいキャンパスで、私はあと四年間過ごすのが楽しみで仕方ありません。ですが、居心地が良すぎて、普通の人よりも多く水大ライフをおくらないように気をつけたいと思います。

水大生2年目

生物生産学科2年 問山 亜由美

『海が好き』、小さい頃から海の生き物に興味

があり、水産大学校に入学してから2年目に突入しました。振り返ってみればあっという間に過ぎた1年でした。

毎日の授業は、専門的なことが中心で難しく感じることもあります。新しい知識が増えるとさらに海への興味が湧いてくるように思います。また、今までであった3度の実習は知識の面、精神の面で成長できるものでした。特に乗船実習では、10日ほどの船内生活、航海当直、激しい船酔い、ロープワークなど初めてのことばかり経験しました。初めはとても不安でしたが、船酔いになれると周りのことを見る余裕もできる楽しい実習でした。

これからは何度か実習があるので、初めての経験、新しい発見を大切に大学生活を送っていこうと思います。

研究三昧の日々

研究科1年 門脇 健

この春に、水産学研究科に進学した門脇 健です。現在、私が行っている研究内容に関しまして簡単に紹介させていただきます。

おいしい魚を作るためには健康でピチピチした魚を養殖する方法が必要です。そのためにはどうやって『健康』でいられるのかを科学的に解析して、これを利用して科学的に養殖することを考えています。『健康』とは、体の中の生体恒常性を保つシステムが健全に働いている状態です。それをモニターする上で、私たちの研究室では自然免疫(すべての動物がもっている基本的な生体を制御するシステム)に着目して研究を行っています。私は現在、日本人の食卓で大きな話題になっているクロマグロを用いて研究を行っています。そして、クロマグロのサイトカインという免疫制御を司るタンパク質の遺伝子発現や、その機能を調べています。いつか、皆様の食卓においしい養殖クロマグロを供給する手助けになることを妄想しております。

クラブ紹介

ヨット部

海洋機械工学科3年 佐藤 俊介

水産大学校は、その名の通り海に深く関係した学校です。こんなに近くに海がある大学は全国でも稀なのではないでしょうか。このマリンスポーツをするには絶好の水大で、我々ヨット部は日々活動しています。

現在は部員数20名で、学校近くの古宿海岸を拠点に活動しています。練習は主に土日ですが、レース前や日没が遅くなると平日もヨットに乗っています。

ヨット競技は、海や湖において風や波といった自然の力を利用して走り、レースをして競うスポーツです。あまり知られていないようですが、オリンピックや国体にもセーリング競技があります。

我々は、主に国際470級(2人乗り)という艇種のヨットに乗って練習をしています。そして毎年数多くのレースに参加しています。レースには1艇単位の個人戦と、3艇で1チームの団体戦があり、オ

リンピックやオープンレースは個人戦、大学で主たるレースのインカレは団体戦です。今年度は、西日本ヨットウィーク(個人、団体)、Sail Hiroshima(個人)、中四国学生ヨット選手権大会(中四国インカレ、個人、団体)の大会に出場しました。そして中四国インカレにおいて、個人戦優勝(全日本個人選手権出場権獲得)と団体戦第2位という成績を得る事が出来ました。

ヨットで海に出る事はとても楽しい事ですが、厳しい一面も持ち合わせています。時には自然の力の猛威を目の当たりにします。挫けそうな時もありますが、仲間と共に励まし合ってその厳しさを共有し、乗り越える事で強い絆が生まれます。この絆こそがヨット部の宝です。

8月の後半に、全日本インカレ予選があります。まずは予選を突破して全国の舞台に立てるよう、全員で一致団結してレースに望みます。我々は、これからは目標に向かって挑戦し続けていきます。

学生部だより

平成18年度における就職対策と進路状況について 学生部長（就職対策検討委員長） 前田 和幸

本校では学内に「就職対策検討委員会」を設置して、毎年、(1) 専門講師による就職指導：春と秋の2回就職情報会社から就職対策の専門家を招き、3年生を主対象とした就職に関するガイダンスを実施。(2) 就職手引き書の配布：「大学生のための就職応援ブック」を3年生全員に配布し、これを用いた就職指導を行う。(3) 企業訪問の実施：各学科の就職担当者及び学生部職員が、水産関連会社・

団体等を訪問し、本校及び本校学生の紹介を行うとともに、企業等の採用情報（時期及び求める人材等）を把握する。(4) 企業説明会の実施：随時及び合同で学内において実施。(5) 就職内定学生による進路相談会の実施。等の活動を行っています。この結果、今年度の3月31日現在における就職率は94.5%となっており、このうち水産関連分野への就職割合は就職希望者ベースで71.2%、就職内定者ベースで約75.4%となっています。なお、本科、専攻科、研究科における進路状況及び進学・就職先は別表のとおりです。

平成18年度卒業・修了者の進路状況

平成19年3月31日現在

本 科 専 攻 科 研 究 科	卒業者 数	進学関係				水産関連分野							計 (内定者)	試 験 準 備	進 路 未 定 者	計	水産関連就職者 (3)									
		大 学 院	研 究 科	専 攻 科	研 究 生 等	国 家 公 務 員	地 方 公 務 員	各 種 団 体	漁 業 ・ 養 殖	水 産 加 工	水 産 流 通	調 査 開 発 等					資 機 材 供 給 等	計	合 計	(1) 就 職 希 望 者	(2) 就 職 内 定 者	就 職 率				
水産情報経営学科	男	14	1							1	3	2	6	6	12		1	13	14	46.2	50.0	92.3				
	女	4			1	1				1			1	2	3			3	4	33.3	33.3	100.0				
	計	18	1		1	2				1	4	2	7	8	15			16	18	43.8	46.7	93.8				
海洋生産管理学科	男	40		2	16	2	20			1			9	3	13	6	19	1	20	40	65.0	68.4	95.0			
	女	6	1	1	1	1	4						1		1		1	1	2	6	50.0	100.0	50.0			
	計	46	1	3	17	3	24			1			10	3	14	6	20	2	22	46	63.6	70.0	90.9			
海洋機械工学科	男	36	1	1	19		21						12	12	2	14		1	15	36	80.0	85.7	93.3			
	女	2			2		2												0	2	-	-	-			
	計	38	1	1	21		23						12	12	2	14		1	15	38	80.0	85.7	93.3			
食品科学科	男	29	5	2			7						10	5	1	16	3	19	3	22	29	72.7	84.2	86.4		
	女	12	1			1	2						2	4		6	3	9	1	10	12	60.0	66.7	90.0		
	計	41	6	2		1	9						12	9	1	22	6	28	4	32	41	68.8	78.6	87.5		
生物生産学科	男	22	1	6			7		2	1	1	1	4	1	4	14	1	15		15	22	93.3	93.3	100.0		
	女	4							2	1	1	3	4	1	4	16	3	19		4	4	50.0	50.0	100.0		
	計	26	1	6			7		2	1	1	3	4	1	4	16	3	19		19	26	84.2	84.2	100.0		
計	男	141	8	11	35	2	56		2	2	1	12	21	1	22	61	18	79		6	85	141	71.8	77.2	92.9	
	女	28	2	1	3	3	9					4	6		10	7	17		2	19	28	52.6	58.8	89.5		
	計	169	10	12	38	5	65		2	2	1	16	27	1	22	71	25	96		8	104	169	68.3	74.0	92.3	
専攻科船舶運航課程	男	12							1	1	3		1	1	8	4	12			12	12	66.7	66.7	100.0		
	女	6								1			1	1	4	1	5	1		6	6	80.0	66.7	100.0		
	計	18							1	2	3		1	2	12	5	17	1		18	18	70.6	70.6	100.0		
専攻科船用機関課程	男	20								2			1	6	1	3	13	4	17	3	20	20	76.5	76.5	100.0	
	女																0			0	0	-	-	-		
	計	20								2			1	6	1	3	13	4	17	3	20	20	76.5	76.5	100.0	
計	男	32							1	3	3		2	7	1	4	21	8	29	3	32	32	72.4	72.4	100.0	
	女	6								1			1	1	1	4	1	5	1		6	6	80.0	80.0	100.0	
	計	38							1	4	3		2	8	2	5	25	9	34	4	38	38	73.5	73.5	100.0	
研 究 科	男	8	1			1	2			1		1	2	1	1	6		6			6	8	100.0	100.0	100.0	
	女	2								1			1			2		2			2	2	100.0	100.0	100.0	
	計	10	1			1	2			1	1	1	3	1	1	8		8			8	10	100.0	100.0	100.0	
総 合 計	男	181	9	11	35	3	58		1	6	5	1	15	30	3	27	88	26	114	3	6	123	181	73.3	77.2	95.0
	女	36	2	1	3	3	9			1	1		4	8	1	1	16	8	24	1	2	27	36	61.5	66.7	92.3
	計	217	11	12	38	6	67		1	7	6	1	19	38	4	28	104	34	138	4	8	150	217	71.2	75.4	94.5

注：(1) (水産関連) ÷ (就職希望者) (2) (水産関連) ÷ (就職内定者) (3) (内定者) ÷ (就職希望者)
※就職希望者の数値について、専攻科にあたっては就職希望者数のうち試験準備者数を除く

【分類内訳】 各 種 団 体：水産に関する団体（漁業、流通、船舶等関係団体）
水産関連 漁 業 ・ 養 殖：水産動植物の採捕又は養殖の事業者等
水 産 加 工：水産動植物を原料又は材料として、食料、肥料その他の有用物を生産する事業者
水 産 流 通：水産物の貯蔵、運搬、販売等の流通に関する事業者
海洋水産・調査開発等：海洋水産関連の調査会社
資 機 材 供 給 等：水産業やそのサービス部門等に資機材供給等を行う関連事業者等
そ の 他：水産業関連以外（公務員・団体・企業）

平成18年度卒業生進学・就職状況一覧表

平成18年3月31日現在

◎進学(大学院等)	キスコフーズ(株)	セブンイレブン	(株)前川製作所	日本クランクコルク(株)
水産大学校専攻科	キュービー(株)	関光汽船(株)	日新興業(株)	ベウクルーズ
水産大学校研究科	オタフクソース(株)	ヤマエ久野(株)	(株)日阪製作所	(株)タカミヤ
北海道大学大学院	はごろもフーズ(株)	(株)武蔵野	(株)ダイキンアプライドシステムズ	(株)秋葉牧場
東京海洋大学大学院	山梨缶詰(株)	(株)餃子計画	ヤンマーエネルギーシステム(株)	ブックオフ
筑波大学大学院	フンドーキン醤油(株)	(株)魚力	内海造船(株)	宇部興産海運(株)
宮崎大学大学院	(株)かば田食品	マリンフーズ(株)	三井造船マリナー・サービス(株)	(株)霧島海運商会
琉球大学大学院	ケンコーマヨネーズ(株)	大阪魚市場(株)	丸一建設(株)	北陸中央食糧(株)
兵庫県立大学大学院	(株)久世	阪九フェリー(株)	(株)みなと山口合同新聞社	上野トランステック(株)
◎官公庁	(株)ニチロ	琉球海運(株)	(株)第一製網	太洋日本汽船(株)
水産庁	(株)日本水産	日本郵船(株)	(株)エヌエヌユー	日正汽船(株)
山口県	大洋エーアンドエフ(株)	J R九州高速船(株)	グリーン SHIPPING(株)	新和海運(株)
長崎県	(株)みなり	川崎近海汽船(株)	商船三井テクノトレード(株)	NYK LNG シップマネジメント(株)
和歌山県	(株)シマヤ	太平洋フェリー(株)	旭海運(株)	順不同
福島県	(株)極洋	第一水産(株)	日本サルヴェージ(株)	
茨城県水産試験場	福岡中央魚市場(株)	マックスバリュ	岡部(株)	
浜田水産高等学校	日本食研(株)	(株)横浜八景島	富士ソフト(株)	
栃木県立馬頭高等学校	横浜冷凍(株)	成栄海運(株)	(株)A I D	
◎水産関係各種団体	仙都魚類(株)	(株)カバリアー・ジャパン・テバロップメント	加賀農業協同組合	
水産大学校	大都魚類(株)	(株)BMLフードサイエンス	梅木電気	
香川県漁業協同組合連合会	中島水産(株)	(株)泰東	(株)日本イベント	
(社)日本海事検定協会	下関海陸運送(株)	(株)CACマルハシステムズ	(株)ハーベスト	
(財)新日本検定協会	(株)馬車道	(株)菊谷茂吉商店	(株)ニッソーサービス	
J I C A	(株)とりせん	西日本ニチモウ(株)	山口県警	
◎民間企業	すかいらーく(株)	長崎ペンギン水族館	森永乳業(株)	
クラレイ(株)	日本ゼネラルフーズ(株)	(株)新笠戸ドック	成和産業(株)	
(株)サンヨーフーズ	大一(株)	太平電業(株)	西日本フーズ(株)	
理研ビタミン(株)	旭食品(株)	(株)西島製作所	サラヤ(株)	

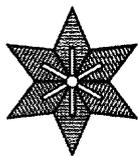
平成19年度入試状況

本校の平成19年度入試状況をお知らせします。

推薦・一般入試の志願者総数は、779名で昨年度より78名増でした。一般入試の学科別の応募状況は、水産情報経営学科31名(募集人員12名に対する倍率2.6倍)、海洋生産管理学科88名(募集人員23名に対する倍率3.8倍)、海洋機械工学科99名(募集人員23名に対する倍率4.3倍)、食品科学科152名(募集人員32名に対する倍率4.8倍)、生

物生産学科266名(募集人員18名に対する倍率14.8倍)でした。また、先に行われた推薦入試には、全学科で143名(昨年と同数)が応募し、71名が合格しました。

少子化の進むなか、オープンキャンパス、高校訪問や公開講座等の広報活動を通じて、本校の特色と個性豊かな教育方針を全面に打ち出し、受験生に魅力ある大学校となるよう一層の努力をして参る所存であります。



水大学園だより

独立行政法人水産大学校 〒759-6595 下関市永田本町2丁目7-1 電話083(286)5111
[発行] 学生課 ホームページ <http://www.fish-u.ac.jp>

きらりと光る水産大学校をめざして

理事長 藤 英 俊



昨年を振り返りますと、66年の歴史を持つ本校にとって多くの出来事が展開した1年であったのではないかと思います。その主なものは次のような事柄です。

2月2日下関には珍しい雪の中で四代目耕洋丸の進水式を行いました。この耕洋丸は6月竣工し、7～8

月にかけ下関・高松・東京・神戸で一般公開を行い、「水産の未来を担う練習船」として多くの人に見学いただきました。10月21日からは42名の実習生と共に初の遠洋航海に出航し、79日間の航海を終え1月7日下関に無事帰港しました。航海中ハイテク装置の試験実習やインド洋でのマグロ延縄操業、海洋観測などの充実した実習を行い、帰港地では現地の水産事情を調査するなど多くの成果をあげ、実習生も大きく成長したように見えました。

施設面は、新たな講義棟が建設されることとなり、3月の二次元造波水槽施設の移転完成を待ち、4月から建設に取りかかり、本年3月完成予定で工事が順調に進んでおり、益々教育環境も充実し、学生にとってより勉学に励める快適な学園整備が図られることとなります。

水産庁長官の来校は、4月白須敏朗長官（現農林水産省事務次官）が入学式、11月山田修路長官（9月就任）が学園視察で来校されました。このことは、教職員はもちろん学生にとっても、本校の重要性を再認識し、この上ない刺激と自覚を与えたように思えます。

研究でのトピックは、「ふく刺しを宇宙に贈るプロジェクト」の研究から生まれた「無菌フグ」、新鮮な魚肉を無菌状態で2か月以上保存できる技術を開発したもので、新聞紙上や12月末にはテレビ東京などで取り上げられました。各分野で新しい研究が芽生えていることは大変喜ばしいことです。

国際交流は、3月上海水産大学と学術交流協定を結び、8月意見交換会、11月上海で95周年記念式典・シンポジウムに出席し一步を踏み出しました。釜慶水産大学とは11月に第13回学術交流を釜山で行いました。練習船による交流は、天鷹丸がSEAFDEC（東南アジア漁業開発センター）とブル

ネイの水産資源の開発に向けたブルネイ近海の海洋資源共同調査を行いました。また、毎年受け入れている JICA および OFCF の海外研修生の研修は、本校の学生にとっては異文化との交流であり重要なコミュニケーション実習そのものとなっております。

昨年12月末に終了いたしました本校を含む独立行政法人の見直しに関しましては、主務省である農林水産省をはじめ関係各位のご理解とご尽力に心から感謝申し上げます。

ところで、日本の国土は約38万km²で、世界第60位ですが、排他的経済水域（EEZ）の広さは約447万km²と国土の12倍（世界6位）で自国の沿岸から200海里（約370km）の範囲内の水産資源および鉱物資源などの非生物資源の探査と開発に関する権利を得られる代わりに、資源の管理や海洋汚染防止の義務を負っています。

わが国は古い歴史を持つ有数の海洋国家であり、漁業情勢は激変しています。例えば、若年層を中心に「魚離れ」の進行、輸入競争に負ける「買い負け」、燃油価格の高騰と魚価の低迷、漁業就業者の減少、さらに海洋環境の悪化などが挙げられます。

農林水産行政も水産基本計画に即して、水産資源の回復・管理の推進、漁船漁業の構造改革、漁港・漁場・漁村の整備などが取り組まれています。

これからの水産を支える人材の育成は急務です。それを本校が支えなければなりません。本校は現状に固執することなく教職員の強い思い・情熱で、地域だけでなく日本や世界においてもきらりと光るかけがえのない存在となる学園を目指していきたいと考えております。

信頼でき、感謝の気持ちを忘れない、生き生きした教職員の背中を見て育った学生は、社会的にも高く評価される人間形成ができ、このような学生が生活する地域も元気づくこととなることを確信し、教職員が丸となって努力していく所存ですので、ご指導ご鞭撻を心よりお願い申し上げます。

最後になりましたが、元水産大学校長・村上正忠氏（製造学科8期卒）が秋の叙勲で瑞宝中綬章を三本菅善昭前本校理事長が11月大日本水産会から水産功績者の表彰を受けられました。皆様方にご披露すると共に心からお慶び申し上げます。

最近の話題

練習船天鷹丸第162次航海(専攻科遠洋航海) SEAFDEC^{*}国際共同調査⁻について

天鷹丸船長 水谷 壮太郎

天鷹丸は、2007年5月17日から7月11日までの56日間、南シナ海、タイランド海湾及び東シナ海において、総航程7,327海里(約13,570km)の遠洋航海実習を行いました。実習生は、専攻科生37名で、船舶運航課程生16名(うち女子学生1名)と舶用機関課程生21名(うち女子学生2名)です。乗船学生に対し、本科(4ヶ年)において修得した課程の上に、更に精深な専門的学識を修め、高度の専門技能を修得することを目的に、航海当直、天測^{*2}、出入港操船、狭視界操船、荒天操船、サンゴ礁海域・河川などの特殊海域操船、気象観測、船体整備、非常部署、機関運転、機関制御並びに整備実習など船舶運航に関する講義及び実習のほか、南シナ海、東シナ海海域の海洋環境観測実習及び中層トロール漁業実習を行い、新時代の水産界を担う漁業生産技術者・船舶運航技術者並びに水産関連技術者・舶用機関技術者としての専門技能を習得させました。

また、本校とSEAFDECとで2005年5月に締結された学術交流協定により、2007年6月4日から12日までの9日間、南シナ海のブルネイ・ダルサラーム国沖において、同国漁業局研究員6名、SEAFDEC訓練部局調査員2名、本校海洋生産管理学科教員4名・研究科生1名が乗船し、専攻科生の実習の一環として、計量魚群探知機による水中音響調査を主体として、7ライン・14観測定点において、CTD^{*3}装置による海洋環境観測並びに中層トロール網・Bongo net・IKMT netによるプランクトン・稚仔魚採集を実施し、石油開発台が林立するブルネイ海域の浮魚漁業資源共同調査を行いました。

ムアラ港(ブルネイ・ダルサラーム国)寄港時には、同国アーマッド産業一次資源大臣、ハミッド次官、マリアナ副次官、ハスナ漁業局長ほか在ブルネイ日本国橋本逸男大使、タイ国からシリSEAFDEC事務局長が訪船され、Wasan(ワサン)職業訓練学校生12名・同教員6名、漁業局職員とともに船上レセプションを行い、今航海の国際共同

調査と乗船実習の説明を行った後、船内を回り設備機器・調査器材について専攻科生が各所で自分たちが作成した英文資料で説明し国際親善交流を行いました。共同調査とレセプションについては、同国テレビ局や新聞4社に第1面のニュースとして取り上げられブルネイ国で報道されました。そのほか漁港での漁船からの水揚げの実態や、日本向けに輸出されている養殖エビ冷凍箱詰め工場見学を行いました。ブルネイでは、国教がイスラム教のため飲酒は厳禁で、ホテルやレストランでも買えません。石油や天然ガスが産出し、国民は納税義務はなく、教育や医療は無償で受けられます。治安は良く、安心して街中を歩くことができました。

バンコク(タイ国)寄港時には、SEAFDEC訓練部局施設見学、在バンコク同窓の活躍されるすり身製品工場や寿司ネタ(日本向け)製造工場の見学を行うとともに、Kasetsart(カセサート)大学水産学部海洋科学科学生35名が来船した際には、専攻科生がエスコートして船内見学を行い、その後交流会を実施し国際的視野を養いました。また、船上レセプションを開催し、タイ国農業協同省水産部次長、同部海洋水産研究開発局長、SEAFDEC事務局長、在タイ日本国大使館参事官、アジア太平洋障害者開発センター局長、Kasetsart大学海洋科学部教授、Chulalongkorn(チュラロンコン)大学海洋科学科長ほかSEAFDEC事務局及び訓練部局職員など60名が来船し盛会裏に終えることができ、国際親善交流を行うことができました。

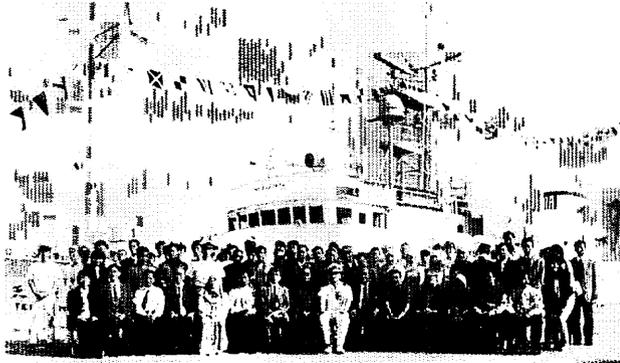


タイ国カセサート大学海洋科学部学生との交流

さらに、バンコクから日本への帰途、我が国沿岸への来遊過程を科学的に解明する中国・韓国との国際共同調査である大型クラゲ(エチゼンクラゲ)の目視観測調査を対馬海峽西水道まで実施し、中層トロールによりクラゲを採集しました。東シナ海においては、黒潮観測定線(TAWARAライン)でのCTD装置による海洋環境調査を実施しました。

SEAFDECとの共同調査は、2005年のマレーシア海域に続き2回目となりました。今後も継続されて、学生の国際的感覚が養われると共に、国境を越えて学生同士の交流もより一層発展して行くことになると思います。

練習船の役割、利用について、ご父兄の皆様方にもご理解とご協力をお願いしたいと思います。インタ



船上レセプション記念撮影(ブルネイ国ムアラ港)

ーネットの本校ホームページに練習船コーナーがあり、航海中の状況を正午通報でお知らせしています。

- *1 SEAFDEC: 東南アジア漁業開発センター、1967年設立、ASEAN 諸国10カ国加盟、①事務局(タイ) ②訓練部局TD(タイ) ③海洋水産調査部局 MFRD(シンガポール) ④養殖部局 AQD(フィリピン) ⑤海洋水産資源開発管理部局 MFRDMD(マレーシア)の5部局で構成されている。
- *2 天測: 六分儀を使用して太陽や恒星の高度を観測して船の位置を算出すること。
- *3 CTD: Conductivity Temperature Depth の略。停止した船上からCTDセンサーを海中に沈め、各深さの水温、電気伝導度を連続的に測定する。深さは圧力で計測し、水温・電気伝導度を計測することによって海水の塩分を算出することができる。

日本からハワイへと雄飛した漁業者たちの姿を追って

水産情報経営学科 講師 小川 真和子

水産大学校に着任してからもうすぐ2年が経ちます。アメリカ研究を専攻し、特に歴史分野を得意としている私がこれまで研究していたのは、アメリカから日本へやってきた女性宣教師、また日本から海外へと活動の範囲を拡げ、戦前、平和運動などに従事した日本人女性キリスト者たちの活動でした。要するに水産とは縁もゆかりもないような人たちが研究対象であったわけです。ですから、水大に来た当初は正直言って、いささか困惑してしまいました。だって、図書館にあるのは海や船や魚に関する本ばかり。日々接する学生達が盛り上がるネタは海やら魚やらの話題。やれやれ……とはいうものの、10年間にも及んだアメリカでの留学生活で、冬期、氷点下40度以下にまで気温が下がるミネソタからクリスマスにもサーフィンを楽しむことができる常夏のハワイまでを渡り歩いてきた私の唯一の強みは適応能力の高さ。よっしゃ、これからは水大ならではの研究テーマを探してみようか、と気を取り直して思い出したのが、ここ山口県が、かつて広島について多くのハワイ移民を輩出してきたという事実。

これまでのハワイ日系移民研究で脚光を浴びてきたのは、100年以上前にハワイへ渡り、さとうきびプランテーションなどで働いた農民たちばかり。一方、ハワイの水産業を開拓したのが日本人漁業者たちであること、そして現在でも、その子孫たちがハワイの住民や観光で訪れる人たちに海の幸を提供していることは、あまり、知られていなかったのです。そこで、ハワイの日系移民の歴史を「海」の視点から掘り起こすのは自分の使命、と勝手にその気になった私は、最近、本格的なリサーチを始めました。

去る9月、私はハワイを訪れました。ハワイには現在、鮮魚を扱う市場はホノルルの United Fishing Agency 一カ所のみしかありません。幸い、その二代目社長である大谷明氏とご家族にお会いする機会に恵まれました。明氏の父親である大谷松治郎氏は、明治41(1908)年、17歳の時に故郷である漁業の盛んな山口県周防大島町沖家室からハワイへ渡り、同じく沖家室出身である妻カネとともに、明氏を含む10人の子どもたちを育てな

がら働きに働いて、ハワイ有数の水産会社を作り上げた人物です。また戦前、ハワイの海で活躍していた漁業者のほとんどは、山口や広島、和歌山などからやってきた日本人でした。多民族主義を標榜する現在のハワイと異なり、人種差別が当たり前、白人エリート達に首根っこを押さえられ、日本人が政治力も経済力も乏しい状態に置かれていた時代に「ハワイの水産業は日本人の独壇場」と言わしめた日本人漁業者たちのしたたかさ、パワーには、ただただ圧倒させられるばかりです。また、大谷松治郎氏は、大戦中、米本土の日系人強制収容所に収容され、辛酸を嘗めたのですが、戦後、収容所から釈放され、ハワイへ戻ると同時に、戦争中に一切の漁を禁じられ、壊滅的になっていた水産業の立て直しに尽力しています。

今では多くの日本人観光客で賑わうハワイ。そのハワイの海には、日本人漁業者たちの汗と涙に彩られた物語があることを、少しでも多くの人々に知ってもらえたら、と思いながら私は日々、この人たちのストーリーを追いかけています。



後列右端が大谷明氏、前列左から2人目が筆者。その他は大谷明氏のお子さん、お孫さんたち



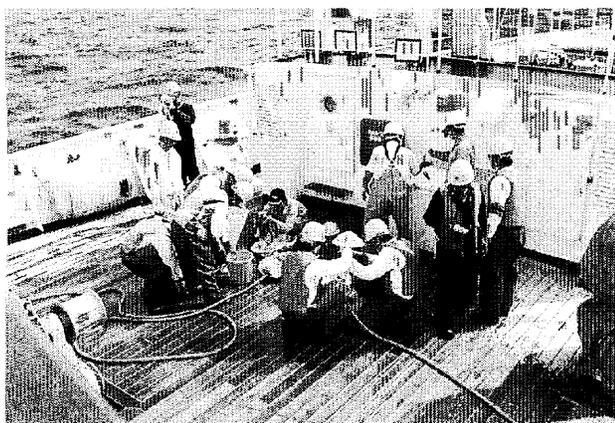
United Fishing Agency の市場の様子

東南アジア地域における学術交流と技術支援への参画

海洋生産管理学科 教授 濱野 明

2005年5月に水産大学校と東南アジア漁業開発センター(SEAFDEC)との間で、調査、研究、教育に関する5年間の学術交流協定が結ばれました。SEAFDECは、東南アジア地域における漁業開発の促進に寄与することを目的に1967年に設立された地域国際機関です。加盟国はマレーシア、フィリピン、シンガポール、タイ、ベトナム、ブルネイ、ミャンマー、インドネシア、カンボジア、ラオスのASEAN加盟国に日本が加わった形で、計11カ国で構成されています。

この学術協定に基づく練習船を活用したSEAFDECとの学術共同調査に本学科の教員も積極的に参加しています。2005年のマレーシアとの南シナ海における共同資源調査には4名(永松公明



自分たちで行うデータサンプリング

先生、中村武史先生、濱野と生物生産学科の上野俊士郎先生)、本年2007年にはブルネイとの共同資源調査にも4名の教員(今井千文先生、永松公明先生、中村武史先生、李雅利先生)が参加し、活発な学术交流と技術支援活動を行いました。この共同調査による学术交流では、南シナ海の生物資源調査による漁業資源管理に関する基礎的知見の収集のほか、中層トロール漁法や計量魚探機を用いた音響資源調査の技術指導などSEAFDEC調査員への技術移転を通して、調査技術の向上を図ることも目的の一つとなっています。このような練習船を活用した国際的な共同調査は、乗船実習中の学生諸君にとっても、各国の調査員と共に調査作業を通して国際的感覚やコミュニケーション能力を向上させる絶好の機会でもあります。また、この学术交流の一環として、SEAFDECの訓練部局(バンコック)にインターン学生として1年間滞在していた水産学研究科(漁業技術管理学専攻)の丸岡侑太君が、本年4月に多大な成果を上げて無事帰国しました。

水産大学校では来年度も練習船を活用したSEAFDECとの学術共同調査が計画されています。本学科では今後ともこのプロジェクトに積極的に参画し、国際的な視野を有した人材の育成に積極的に取り組んでいくつもりでありますので、皆様のご理解とご支援を切にお願いする次第です。

海洋機械工学科の就職と研究

海洋機械工学科長 教授 江 副 覚

最近の企業業績の回復に加えて安全で安心して食できる水産関連製品の提供、高齢化と後継者不足等の解消に関わる省力化、燃料油高騰の打破等に対応するため、海洋機械工学科卒業生に対する就職状況は非常に良くなっています。私たちの食する水産関連食品のほとんどは、漁船による漁獲と船による輸送(物流)、および食品加工機械等の手を経て手元に届けられています。この担い手を育てているのが、水産系大学の中で唯一の機械系学科である海洋機械工学科です。とくに、魚介類を世界中から運んでくる物流の一端を担う大型船舶の海技士(機関)の資格取得が可能な専攻科船用機関課程の修了生は、海洋物流の活況と「機関士」の養成施設が少な

いこともあり、本科卒業生の就職にもまして良くなっています。そのほか、水産食品加工用機械の開発や冷凍食品関連会社等への就職が強く求められています。

次に最近の注目される研究の一端をご紹介します。農林水産省の主催で11月27・28日に東京国際フォーラムで開催された「アグリビジネス創出フェア2007」に、海洋機械工学科からは、「水素エンジン漁船の開発と応用」と「フグ類の高精度品質評価システムの構築」の二つの研究シーズを紹介しました。水素エンジン漁船の開発は、環境に優しくかつ既存の漁船機関を改造することで比較的手軽に水素エンジン機関に転換できるという点で注目されています。また、フグ類の品質評価システムの構築は、非破壊・非接触でフグ類の鮮度や食感に関する有益な情報を消費者や流通業者に提供するだけでなく、市場の目利き人を育成するツールになると考えています。

水産業において、機械工学はどのような貢献をしているのか見えにくい状況にありますが、来場者には工学的な手法を積極的に水産分野に導入している点が新鮮に感じられたようでした。温暖化防止や省力化ならびに非破壊・非接触での品質評価法等で社会に貢献するため、水産において機械工学の重要性はますます増えています。どうぞ就職に有利な学科として、ご認識いただければ幸いです。



アグリビジネス創生フェア2007研究シーズパネル展示会にて

食品科学科の乗船実習

(洋上鮮度管理実習)

食品科学科 教授 原 田 和 樹

水産大学校を特徴付けるものの一つとして、そのカリキュラムの独特さがあります。食品科学科では、船に乗って行う「洋上鮮度管理実習」なる実習があり、3年前から私が担当しております。

この実習は、3年生の必修科目に設定され、11月下旬に水大の練習船「天鷹丸」(国際総トン数1,020トン)に乗船して航海を行い、その間、漁獲直後の魚体処理の重要性を鮮度保持の観点から学ぶ内容になっています。

平成19年は、45名の学生(男子25名、女子20名)と共に、大分県沖の豊後水道の佐伯湾で10班

に別れて実習を行いました。今回は、国際協力機構(JICA)の研修員であるモロッコ人も学生達と共に実習に参加し、国際色豊かなものになりました。

具体的な実習内容は、佐伯湾の養殖業者より、約50cmのブリ(約4kg)の活魚を活魚船から搬入し、一人1匹の割合で、活けめの延髄刺殺を行い、その後の保蔵条件によって、鮮度指標K値や硬直指数R値、マンセル表色系を用いた魚体の体色、魚体の体内温度などがどの様に変化するのかを、苦悶死の魚体と比較しながら調べるといふものです。活けめの延髄刺殺を行った事のない学生達にとっては、新鮮な体験だった様です。

更に、今年の新機軸は、従来は、魚体保蔵の条件が海水水(海水と水が混ざったもの)のみだったのですが、大分県の漁業者さんの協力により、海水アイスラリー(海水のシャーベットアイスみたいなもの)を使用できた事です。

実習では、鮮度保持の技術を学ぶだけでなく、午前6時30分の船上でのラジオ体操から1日がスタートし、就寝までメリハリの効いた生活を送り、同時に、船上での規律を守る事の大切さや、チームワークの大事さを学び、男子も女子も全員、下船する頃には、乗船前のひ弱な顔付きから逞しい大人の顔付きに、間違いなく変わっています。

この様な実習は、全国の大学でも例はなく、私が昨年に高知大学で開催された日本水産学会で、実習の様子を講演発表して紹介させて頂きまして、学会に参加した各大学の先生方から「どこも真似のできない実習だ」と羨ましがられました。



実習風景

謎に満ちたエチゼンクラゲ大量出現の解明を目指して

生物生産学科 教授 上野俊士郎

私は、浮遊生物(プランクトン)の生物学について講義と学生実験を行ない、浮遊生物中最大で水産被害を起こすクラゲ類を研究対象としています。近年の日本海沿岸でのエチゼンクラゲ大量出現による水産業被害はマスコミ報道等によく知られています。10年程前まで、水産の分野では商品価値が低い



クラゲの研究は無用に近い評価をされていましたが、クラゲ被害の増大に伴いクラゲ研究が不遇な扱いを受けなくなり、ちょっと複雑な気持ちでクラゲ研究を続けています。

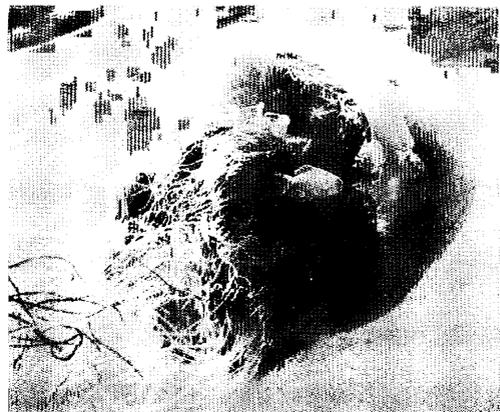
私は目下よく注目されているエチゼンクラゲを研究対象としています。エチゼンクラゲはクラゲの中でも最大級の

超大型クラゲで大変に目立ちますが、その生活史と生態は謎に満ちています。まず、着底生活するポリプから大量発生する場所が特定されていません。最近、発生して間もないクラゲ幼体が中国の長江沖や渤海奥部また韓国西岸域で発見され、やっとその広範な発生場所が確認されようとしています。一方、日本海域で今までクラゲ幼体の採集がないことから、日本ではエチゼンクラゲは発生しないと言われています。なぜ日本海域で発生しないのか、これも大きな謎なのです。

最近、近縁のビゼンクラゲとよく似た生活環をもつことが明らかになりましたが、ビゼンクラゲと違ってエチゼンクラゲのポリプは飼育繁殖が困難で、ポリプからクラゲが発生する水温や塩分濃度等の環境条件は殆ど未解明なのです。1個体のエチゼンクラゲは億単位の受精卵を放出して夥しいポリプを形成すると想像されますから、クラゲ成長とポリプ繁殖の要因が分かれば、大量出現を未然に防止する基本的対策を打ち出すことができます。

また、近年の中国経済の目ざましい発展と期を同じくしてエチゼンクラゲの大量出現が起きていることから、中国沿岸水の富栄養化等の水質変化が大量発生させる原因と推察されています。しかしこの因果関係もまだ謎のままです。

私は水産庁の日中韓国際大型クラゲ調査事業に参加して、この謎に満ちたエチゼンクラゲの生活史と生態の解明のため年間50日間程本校練習船天鷹丸に乗船し、エチゼンクラゲが通過する対馬海峡での分布状況と採集個体の平衡石から得られる齢等の履歴情報について研究室の卒論生や研究科生とともに調査解析し、その謎に満ちた生活史と生態の解明に取り組んでいます。



2005年8月水産大学校の裏海で当時生物生産学科4年生の大里純君撮影のエチゼンクラゲ

就職活動

就職活動での教訓

水産情報経営学科4年 堀内賢志

私が就職活動を始めたのは、3年の11月でした。水産会社を含め様々な会社を回りました。乗船実習で船に興味を持ち、早い段階で造船会社を第1志望群に考えました。第1志望群に当たる造船会社の最終試験での事でした。朝から行われた筆記試験で致命的なミスをしてしまいました。そのあと行われた役員面接で自分をアピールする事が出来ませんでした。もちろんその試験は不合格でした。筆記試験の失敗を面接まで引きずってしまった自分に腹が立ち悔しかったです。落ち込む暇もなく、第1志望である尾道造船の最終面接が始まりました。同じ失敗は、絶対にしないそう心に刻み挑みました。今までで1番自分をアピールする事ができ、この会社から内定を頂く事が出来ました。

あの時の失敗があったからこそ、この結果に繋げる事が出来ました。「失敗をプラスにする」という事が就職活動を通じて得た教訓です。

高みに近づく方法

海洋生産管理学科4年 黒田純太

私は、水産大学校入学当時から養殖関連の仕事に就きたいと考えていました。魚に関する知識を深めようと、自らの考えで下関漁港に通い始めました。4年間の漁港通いをおし、漁業者から活きた知識を得ることによって、魚に関する知識では誰にも負けない自信ができました。

一方、具体的な就職活動方法や企業に関する知識は皆無でした。本格的な就職活動のきっかけは、3年次1月に本校で開催された合同企業説明会でした。ここで、クロマグロ養殖の大手である大洋エアンドエフ株式会社に出会い「この会社に入りたい」と明確な目標を持ちました。

目標が定まったものの具体的な活動方法が分からず不安だった時、担任教員や先輩からのアドバイスが励みになりました。貴重なアドバイスと好きな魚への情熱をもとに一層勉強した結果、内定通知を頂いた時は本当に嬉しかったです。

今、就職活動を振り返ると、好きな事や興味がある事に対する熱意と、勉強によって身に付いた知識が、自信と良い自己アピールに繋がったと思います。

私の就職活動

海洋機械工学科4年 重松顕之

私は大学での経験やこれまで学んだ事を活かし、機械関係に携わる仕事がしたいと思っていました。3年生の秋頃まで就職活動をどのように行ってい

ば良いのか分かりませんでした。本格的に就職活動を始めるきっかけとなったのが、3年生の後半に、学内で行われた合同会社説明会に参加したことです。様々な企業が説明会を実施しており、その中で私は西島製作所の説明を聞き、たいへん感銘を受けました。実際にその会社に就職しようとはまだその時点では思っていませんでしたが、就職活動や学校の先生などに相談しているうちに西島製作所へ行きたいと思うようになりました。

私はまず履歴書などを書くために、自己分析を行い、これまでの自分の人生を振り返り、自分はどのような人物であるかと多くの時間を費やし考えました。就職活動をするまでは自分自身どういった人間かあまりわかっていなかったような気がします。しかし、しだいに良い所や悪い所を含めて自分自身を客観的に見る事ができるようになりました。就職活動を続ける中で私は成長したように思えます。

就職活動で一番大変だったのが面接でした。私はものすごいアガリ症だったので面接が苦手でした。高校受験の面接の時も緊張しすぎて面接中に鼻血が出たくらいに苦手です。就職活動の始め頃の面接は自分でも支離滅裂なことを言っているなど思いました。そんな私でしたが何度か面接を受けるうちに、緊張して自分が思っていることを言えないことに腹立たしく感じ、良い意味で吹っ切れることができました。面接はいかにその会社に行きたいかという情熱を伝えられるかだと思います。

最後に私にとって就職活動とは、自分の思うようにいかないことがあり大変でしたが、真剣に自分に向き合うことのできる良い機会でした。

就職活動は自分探しの旅

食品化学科4年 佐藤千穂

「食の安全・安心を守る仕事がしたい」

私がそう思ったのは大学3年のインターンシップで行った水産庁加工流通課と保健所での体験からでした。食の安全・安心はいつの時代であっても国民の共通の願いであり、食品化学科で学んだことを最大限に活かせる仕事であると考えました。

しかし、就職活動はそう簡単なものではありませんでした。面接では緊張して自分らしさを表現できず、不採用の連続でした。「自分とは?」「長所は?」「どうしたら面接官にうまく伝わるのだろうか?」自分に何度も質問を投げかけました。就職活動から何度も逃げ出しそうにもなりましたが、先生方を始め、両親、先輩や友人などたくさんの方々に励まされ、(財)日本冷凍食品検査協会より内定をいただくことができました。私は食の安全・安心を守るために、その最前線で社会に貢献したいと思います。

先輩の皆さんも水産大学校での貴重な体験を活かし、就職活動頑張ってください。

就職活動に思うこと

生物生産学科4年 古庄将貴

私は志望を食品・水産業界と決め、3年生の11月にエントリーを始めました。最終選考までは進むもなかなか結果が出ませんでした。4月初旬には友人が第一志望の企業から内定を貰った時、本命を落としていた私は心からおめでとうとは言えませんでした。そんな気持ちと自分への不満を抱えて就職活動を続け躓く中、他人に答えを求めてはいけないという父の厳しい言葉で頑張ることが出来ました。結果的に4社の内々定、その中から水産業界3位の極洋に内定を頂きました。私の就職活動が成功だったかはまだ分かりませんが厳しい言葉をかけてくれた父、大丈夫と励ましてくれた母や友人にお礼を言いたいです。

私の就職活動

専攻科船用機関課程 高浦千穂

今、日本国内では海技者が不足していて、10年前と比較すると水産大の学生に対して大きく門戸が開かれています。私は本命にしていた一社だけに絞って受け、その海運会社から内定を頂きました。就職先では機関士として船に乗り、冷凍コンテナなどでの水産関連品の輸送は勿論、石油、天然ガス等の輸送に携わり、我が国の基盤を支えます。

私の実行した就職活動を挙げます。企業説明会に参加、会社訪問、先生・先輩から話を伺う、面接の練習、業界研究等でした。特に情報収集は極めて重要です。しかし逆にその情報に惑わされないこと、そして集めた情報を基に自分で判断することが大切です。

最後に後輩に伝えたいことが2点あります。世界は広くて多種多様な職があること。君たちの可能性は無限大であること。

大 学 祭

2007年海燕祭を振り返って

2007年大学祭実行委員長 (海洋生産管理学科3年) 瀬戸唯之

私たち大学祭実行委員会が活動を始めたのは4月でした。今年のテーマとサブタイトルを決めることから始めて、新入生からも2・3年生からもたくさんの意見が出ました。そして今までにないくらい明るく楽しい大学祭にしたいという思いより「Shine Blue ～輝け海人～」に決まりました。

水大がどのような研究や活動をしているのかを地域の人々にも知って頂きたく思い、例年同様教職員による公開講座を1日目に同時開催したこともあり、大盛況でした。2日目には、恒例となっている吉本興業のお笑いライブで、たくさんの来場者の皆様楽しんで頂くことができ本当に嬉しかったです。

今年は新企画として子供たちを対象とした「ミニ

ゲームコーナー」を企画したりと新しい取り組みもすることができました。

また、私たちは地域の様々な祭典(馬関祭、海峡花火大会、海峡ウォーク、吉見地区ほたる祭、吉見地区ふるさと祭り、海岸清掃、等)にボランティアスタッフとして参加することで地域の人々との交流を大切にしてきました。そういった経験を生かし今年も海燕祭を無事終えることができました。

先生方や先輩方、他大学の大学祭実行委員会のメンバー、地域住民の皆様様の御協力があったからこそ海燕祭が開催できたとスタッフ一同心から感謝しています。

これから大学祭実行委員会は前年の反省点や改善点を見直し、個々が大きく成長していくことと思います。そして、来年の海燕祭をすばらしいものにできるように、これからの体験を活かして欲しいと思います。

学生部だより ～各界で活躍する卒業生～

水大から得た知識や経験と、現在の仕事とのつながり

水産情報経営学科54期卒 遠矢志保

私は、水産大学校の水産情報経営学科を2004年に卒業し、市役所の採用で、教育委員会、生涯学習課に所属し勤務しています。

教育委員会というと、学校を取りまとめる仕事と思うかもしれませんが、学校関係の仕事ばかりではありません。所属している生涯学習課では、様々な年代の方を対象とした学習についてのサポートを行う役割があります。

具体的には、家庭教育学級(幼稚園・小中学校保護者向け家庭教育講座)、中学生高校生のボランティア団体、女性・青年団体、高齢者学級等の運営

補助、小・中学生の夏休みキャンプ、海外交流事業、市民・学校向けの各種講座開講など、内容は様々です。

今の職場は、私のような市役所から配属された者だけでなく、学校籍の先生方、海外からのALT(外国語指導助手)と一緒に仕事をしてい



職場の写真



ふるさとCM審査会の様子

るので、働く中で教えられることが多く、大変良い刺激を受けています。

現在の仕事では、会計事務処理の他、映像編集操作の担当も行っていましたが、学生時代に、パソコン操作の技術を習得した経験が、活かされています。パソコンの映像編集は初めての分野だったので始めは苦戦しましたが、毎年、広報担当と協力して市のPR コマーシャル制作なども行っていきます。制作したCMは地元のテレビ局にて放映しています。また子どもたち向けの映画制作教室で講習を行ったりもしています。

水産大学校では、講義や実技を通して先生方から学ぶことが多く、就職試験・公務員試験勉強の際も、丁寧に御指導いただきました。また乗船実習もあり、一般の大学では経験出来ないことを体験出来ます。それら全ての経験が、現在職場でも活かされていると感じます。学習面はもちろん、行動力、思考力、判断力など鍛えることが出来る素晴らしい環境だと思います。水大で、たくさんのことを吸収し、実社会でも大いに活躍していただきたいです。

日本農林漁業振興会会長賞を受賞して — 家族定置 折田水産の挑戦 —

海洋生産管理学科45期卒 折田 正

我家の小型定置網漁業経営は、父親が小型のます網を設置したのが始まりです。

現在三ヶ統の定置網で漁業経営を行っています。私自身は、水産大学校を卒業後、平成八年に民間会社を退職したのを機に、定置網漁業に従事しました。

定置網漁業は、季節や日によって漁獲量、種類の変化が激しいのが常であり、産地価格の低迷や水揚げ量の不振など、厳しい経営環境の中に取り組みました。

そうした中、指宿市の日曜朝市への出店をきっかけに、定置網での漁獲量を消費者へ直接販売することを始めました。消費者が「新鮮で質の良いもの」、「生産者の見える安心な地元産のもの」を求めているとの声を受け、指宿の道の駅特産品コーナーでの鮮魚の販売にも取り組むことになりました。

毎朝、水揚げされた鮮魚を、鮮度を保持したまま出荷販売をすることで、鮮度の良さを求める消費者の信頼を得ることができました。食べ方や、調理の仕方などの説明を加えたり買いやすい価格設定、調理しやすく一次加工を加えたりするなど販売方法にも様々な工夫をしていきました。家族で協力しながら、毎朝の水揚げ、選別、仕分け、値付けから配送までの作業を分担しています。

鮮魚販売の他にも、定置網で漁獲された鮮魚を用いた網元手作りの干物や燻製などの加工品作りにも取り組んでいます。こうした販売の結果、経営の安定にもつながっていききました。漁業者が直接販売することに対し、県内外からの視察等も訪れるようになりました。その活動内容を県の青年、女性漁業者活動実績発表大会で発表したところ、内容が評価され、今回の農林水産祭において、日本農林漁業進行会会長賞を受賞することになりました。

受賞から一年が経った今では、地元のスーパーにも「折田丸」ブランドとして鮮魚を納めています。地元の旅館やホテル等も地元の魚を求めて購入しに来るようになってきました。

受賞を励みに、今後とも、消費者に「より鮮度の良い地元の魚」を提供していけるよう、努力していきたいと考えています。

私の仕事

製造学科50期卒 (株)ニチロ 山路 康博

私は、製造学科(今の食品科学科)を卒業後、水産大学校水産学研究科へ進学し、平成14年に修了し、(株)ニチロに就職しました。ニチロは1907年に宝寿丸という一隻の船でロシアのカムチャッカへ鮭鱒を獲りに向かったのが始まりです。1970年代「200カイリ時代」に突入し、それまでの中心事業であった漁撈部門の撤退を余儀なくされ、その後は、大きく二つに分けて水産商事部門と食品加工部門を持つ総合食品メーカーとなり、今年で創業100周年を迎えた歴史ある会社です。

私が勤務する石巻工場は、お弁当向けの家庭用冷凍食品(電子レンジ用)を製造しています。製品の品質第一・安全第一をモットーに製造しています。生産工場でもっと大切なことは、品質は基より、いかに生産性を上げるかということです。簡単に言うと無駄を省き、より多くの利益を生み出す為には二つの大きな要因が考えられます。第一に原材料費、つまり、いかに品質の良い・安い原料を仕入れ、製造現場での不良を無くし歩留を上げるか。第二に人件費、すなわち、作業工程の改善や機械の導入により省人化を図り一人当たりの生産数(能率)をいかに上げるか、ということです。

改善は日々の積み重ねであり、失敗や成功を幾度となく繰返し、その先に品質の良い製品ができ、生産性が向上したときには仲間たちと共に喜び、美酒に酔いしれます。しかし改善には終わりはありません。私はこうした日々の改善・ふとしたアイディアの中から生まれる成功を掴む、この一見単純な様で複雑なこの製造屋の仕事が非常に性に合っています。

皆さんもこれから社会にでて、迷い・失敗を多く経験することと思います。しかし、失敗することを恐れず、常に挑戦する姿勢を忘れないでください。それが後には皆さんの成果にもつながるのです。これからも短い学生生活を多くの仲間たちと楽しんでください。

最後に、石巻工場の主力品“いか天ぷら”と“白身&タルタルソース”、そしてあけぼのブランドの商品をお店で見かけたら実際に手に取り、一度食してみてください。きっと我々生産者の思いが伝わることと思います。





水大学園だより

独立行政法人水産大学校 〒759-6595 下関市永田本町2丁目7-1 電話083(286)5111
ホームページ <http://www.fish-u.ac.jp> [発行] 学生課

思うがままに

校長 本村 紘治郎



昭和62年3月に始まった「水大学園だより」は今回で第24号を数えます。月並みな言葉を使えば「二昔」と一年を経過したことになりますが、創刊が計画された当初は年1回の発行であっても担当する教職員の負担や中途挫折に対する懸念などから、些かの躊躇があったと伺いました。し

かし、担当が学生部、学園だより編集委員会、学生課と変遷しながら今日まで継続できたことは、この「水大学園だより」が学生、保護者、ご家族、そして本校教職員や関係者相互の絆となって円滑な意思疎通を図り、意見交換の場として本校の前進に資するエネルギー源の一つとなり続けて来たからだと思えます。

昭和から平成に移ったこの二昔の間、本校自身には様々な出来事があり、そして本校を取り巻く環境も大きく変わりました。創立50周年、学士号取得、耕洋丸世界周航、バブルの崩壊と就職氷河期の到来、2年制水産学研究科（修士課程相当）の発足、全学科に亘る組織改革、独立行政法人化、運航士教育の取り組みと廃止、就職売り手市場の復活、大学全入時代の到来と本校受験生の減少、練習船耕洋丸の代船建造、体育館や講義棟の落成、独立行政法人の見直し、水産流通経営学科の発足など、ざっと思いつくままに挙げてみてもこれだけあります。これまでに、本校の教職員が本校の発展と向上を願い、携わってきた作業量には計り知れないものがありました。紆余曲折がありながらも、今の食料と環境の問題を水産教育と研究の面から解決する本校の存在意義は極めて重要です。

本校の教育運営上、自信を持つべき点は、

①高等教育機関としては、「文部科学省の大学設置基準」を満たして大学評価・学位授与機構の審査

を通過し、

②技術者教育においては、「日本技術者教育認定機構（JABEE）」の認定を目指し、

③海技士教育においては、「国土交通省の船舶職員法及び小型船舶操縦者法」における海技士及び小型船舶操縦者の養成施設に認定され、

④海上無線教育においては、「総務省の無線従事者規則」による第一級海上特殊無線技士の養成施設に認定され、

⑤食品衛生教育においては、「厚生労働省の食品衛生法」における食品衛生管理者及び食品衛生監視員の養成施設に認定され、

⑥独立行政法人としては、「国立大学法人と異なる特色や独自性」のある教育を行い、総務省などからの外部評価や国民に対する説明責任に応えうる活動をしていること、すなわち本校の教育が他機関で定められた資格取得の基準を十分に満たし、些かも揺るぎない実学教育を行っていることにあります。

独立行政法人としての評価を受けることは例年のことですが、今年度は加えて学位授与機構の定期審査（本科、および研究科）、JABEEの本審査、海技士教育の定期調査という大きな山場を迎えますので、現在、担当部課では準備作業に多忙を極めています。

ところで本校では、今年度から新たに水産流通経営学科が発足しました。産業界の実状に合わせ、水産流通分野を強化して需要に応えることが目的です。新学科の存在が受験生に十分浸透されているかどうか幾ばくかの懸念もありましたが、学科の入学者は定員を大きく超え、今後も受験生の関心が高まることを期待しているところです。水産流通経営学科の発足に合わせて、本校の全カリキュラムを抜本的に見直しましたので、新入生には新たなカリキュラムによる効果的・効率的な教育が行われています。

私は残り3ヶ月ほどで4年間の校長任期を満了いたします。皆様方には一方ならぬご配慮を賜り、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。大学全入時代を迎えてもなお、本校への入学応募者が増加の一途をたどり、知力、精神力、体力をバランスよく備えた水産人が育成され、本校が発展的に継続し、永久の栄えあることを切に願っています。

最近の話題

耕洋丸竣工

耕洋丸船長 田 渕 清 春

昨年6月29日、三菱重工下関造船所で多くの関

係者が出席し、耕洋丸の竣工式が行われ、白い真新しい船体が水産大学校に引き渡されました。

機器整備、船用品積み込みを済ませ、7月5日、トロール漁具の試験操業実施のため、本校教員及び

造船所や漁具・漁業機器メーカーのスタッフ、計30数名を乗船させ東シナ海に向かいました。東シナ海では9日間に渡り、網に数種類のセンサーを取り付け、表層・中層・着底トロール漁具試験操業を実施、各センサーの作動調整、曳網速度・抵抗・浮沈関係・漁具位置・オッター間隔の確認などを行うとともに、省エネ・省人・省力化、資源管理型漁業を目指したオートトロールシステム、STNS（オートトロール&ナビゲーションシステム）による曳網実験を実施しました。STNシステムについては中層曳きが主で、網に取り付けた漁具形状測定器（網深度、網高さ、オッター深度・間隔、袖網深度・間隔、ヘッドロープ深度、網速度のセンサー）、漁具位置測定器（本船からの相対距離・方位及び網深度から漁具の3次元位置を算出する）及び無線式トロールソナーの取付位置を確定し、種々の実験を行いました。予定では全周スキャンソナーで魚群を感知して、その映像を自動船位保持装置（DPS）モニターに移し、モニター上の目標魚群をターゲットロックすると、ロックされた目標魚群位置に漁具を誘導するため自動操船するようになっているのですが、今回は反応の強い魚群を見つけることができず、モニターにダミー信号を設定し、実験しました。実験は数十回行いましたが、その結果、ロックされたダミー信号の位置に漁具が誘導されることを確認しました。これらの漁具試験は8月の専攻科乗船時の航海（第2次航海）においても実施され、概ね建造仕様書を満足するものであることを確認しました。

7月19日には下関カモンワークにて下関市長はじめ多くの関係者が出席し、竣工披露式が執り行われた他、7月21日には一般公開が行われ、1590名の市民に船内が披露されました。

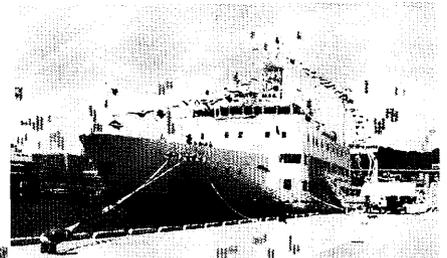
7月24日、4代目耕洋丸の第1次航海として専攻科学生37名を乗船させ、瀬戸内海を勇躍西に向かい、高松・神戸・東京に寄港し、一般公開を行い、多数の市民、卒業生、学生の父兄の方々が来船しました。一般公開は長崎、函館（第3次航海）、名古屋（第5次航海）でも行い、本船の充実した教育・実習設備及び漁業・調査研究設備などを披露しました。

10月21日、海洋生産管理学科・海洋機械工学科4年生など42名を乗船させ、本校職員、在校生に見送られ、新耕洋丸として初めての遠洋航海に船出し、南西諸島沖、南シナ海を南下、予定通り9日後、サイゴン川を遡行、ホーチミンに入港しました。その後、マラッカ海峡を西航しペナンに寄港、11月にはインド洋でマグロ延縄操業を実施しました。旧船では1鉢（300m）づつ幹繩を連結しながら投縄し、揚縄時は連結を解いて1鉢づつ収納する方式でしたが、新船では投縄機、投餌機、繰込機、投縄指示器、幹繩格納機、幹繩格納箱などが設置され、従来のマグロ漁船の延縄設備での操業を行うことになりました。ほとんどの乗組員が初めて扱う漁具なので専門家の乗船を依頼し、その指導の下で操業を行いました。2回目まではいろいろトラブルが

発生しましたが、3回目からは比較的順調に投縄、揚縄ができるようになり、操業後半には学生も積極的に作業に参加させ、最終日には針1000本入れることができました。

本校練習船は「全学科の学生を乗船させ、所定の学科目を教授し、併せて水産に関する調査・研究を行う」とされています。20年度からは海技士教育はもとより設備された漁具、調査観測機器の使用頻度を高め、学生に水産・海洋の総合的な観測・調査手法の技術習得の指導に努めるとともに、委託調査などを積極的に引き受けたいと思っています。

耕洋丸▶



◀インド洋でのマグロ延縄操業

水産流通経営学科となって再出発しました

水産流通経営学科長 教授 三輪 千年

2008年の年明け早々に中国冷凍餃子の残留農薬事件が起こり、冷凍食品に対する不信感が頂点に達したところに、ウナギの産地偽造や牛肉の擬ブランドなど食品流通を巡る新聞等の社会面を賑わす事件が続いています。水産業界や流通業界が、永年にわたって消費者との間で築いてきた「信頼」を根底から壊す結果となるこうした事態に、怒りがこみ上げてきます。この怒りは、真面目に水産関係に携わってきた者だけではなく、水産物をこよなく愛する消費者の怒りでもあります。これらの事件は、関係者を始め消費者に対する許し難い背任行為と言えます。それだけに、消費者の間で“食の安全や健康”への関心が今まで以上に高まっています。

今日の水産業、及び水産流通業においては、消費者の多様なニーズに応えるだけでなく、消費者の信頼に応える質の高さと、消費者を思い遣る“マインド=心”が備わっていることが求められています。美味しくて豊かな水産物を安定的に配給するのはもちろんのこと、消費者に安心して喜んでもらい、最高の満足を提供できる環境を作り出すことが重要になっています。最近では、燃油高騰問題に、漁業生産者の高齢化、後継者不足、資源の減少など漁業生産を取り巻く環境も厳しく、生産者と消費者をつなぐ「流通」があらためて問われています。

そこで、これまでの水産情報経営学科から水産流



秋水産物地方卸売市場での実習風景

通経営学科として新たに出発し、消費者と生産の現場を結ぶ人材を育成したいと考えています。消費者の“厳しい視線”と“期待”に応え得る人材を育成するためにも、今まで以上に、水産物の流通、水産業に関する経営や経済に対する知識と技術・スキルの習得に力を入れ、また水産行政など幅広い分野で活躍できる人材の育成を目指しています。

平成20年度の募集定員は20名でしたが、4月に新学科生として迎えたのは定員を大幅に超える35名で、それだけ新学科に寄せる期待の高さが現れています。

これまでにも、当学科の卒業生は水産流通分野の世界に入って行き、水産物の買い付けで世界を飛び回り、また東京の築地市場や札幌、大阪、名古屋、福岡など大都市の卸売市場をはじめとする多くの流通分野で活躍しています。

・流通情報講座

この講座では、水産物が生産されてから消費されるまでの流通過程や、水産物に値段が付いて取引される市場などに関わる問題を経済的・社会的視点から学び、研究しています。また、今日の水産物流通にとって欠かせないツール（道具）となっている情報技術もあわせて教育・研究しています。これらの教育・研究を通じて、今後の水産業や地域のあり方を学生たちと一緒に考えています。

主な研究内容としては、水産物流通の構造変化、水産物卸売市場の再編成、水産物貿易とグローバル市場化、地産地消、水産物消費、食生活の変化、地域流通、女性起業などがあります。

・経営管理講座

水産業を営むための経営資源（魚、漁船、水産業で働く人たち）を有効に使って効率的な水産業経営やそのあり方を学び、研究しているのが経営管理講座です。

限りある水産資源を将来にわたって利用し続け、水産業の持続的な発展を保障するためには、漁業会社等の個別的な視点だけでなく、国や世界レベルからもこれら経営資源の利用を考える必要があります。このためには国の政策、法律、制度なども学ぶことが必要となります。水産業とその社会的な背景に関する調査・研究も行っている講座です。

・社会文化講座

学生が専門分野において活躍するための基礎となる教養に関連する個々の分野を研究します。そして全学共通科目のうち人文・社会科学、外国語、体育

科目を教授します。それと同時に、水産学関連の学際的研究・教育にも取り組んでいます。

新体制スタート！ 漁場環境学分野

海洋生産管理学科 教授 宮地 邦明

今年、4月1日付けで海洋生産管理学科教授を拝命した宮地邦明です。資源環境計画学講座に所属し、漁場環境学分野で、海洋物理学、海洋気象学、水産資源環境学を担当します。

また、本年度の組織改正に伴い、鬼塚剛助教が水産情報経営学科から配置換えとなって漁場環境学分野に加わりました。本年度からは、滝川哲太郎助教と合わせて3名によるトロイカ体制で漁場環境に係わる教育・研究を推進することになりました。

私は、大学を昭和47年に卒業以来水産庁水産研究所（現、独立行政法人水産総合研究センター）にて水産研究に携わってまいりましたが教育の現場での経験は無く、新米教員ということになります。一方、二名の助教はすでに教員経験を積んでおり、卒論指導などに熱心に取り組んでおります。新米教員としては彼らの助けを借りながら、水産大学校の教育理念「水産分野及び関連分野を担う人材育成」の実現に貢献したく思っております。

さて、その理念ですが、水産業に役立つ実学教育とも換言できようかと思えます。本校を巣立って職業人になったときに役立つ学問・技術を教育・伝授することが求められていると理解するところです。

気象学については、船舶職員にとっては必須の知識でありますし、流通や増養殖業など他の分野でも役立つ学問分野であることは誰しもが理解できようかと思えますが、海洋物理学さらに水産資源環境学となると一般になじみが薄く、学生たちも大学で初めて出会った学問分野であるに違いありません。しかしながら、現在の学生は否応なしに地球温暖化や食糧不足の問題に真正面から取り組まねばならない世代であるだけに、海洋および生物生産に関する基礎的知識は必須となりましょう。彼らが社会に出て時を経た後、大学時代に受けていてよかったと思ってくれるような授業を新体制で構築したく思っておりますので皆様にはこれまでも増してご理解とご支援をお願いする次第です。



着任にあたって

海洋機械工学科 助教 田村 賢

今年3月に本校に赴任して以来、4ヶ月半が経ちました。私は生まれも育ちも下関市ですので、季節の移ろいを5感で感じることができるこの素晴らしい



い環境に居ることを懐かしくも嬉しく思います。裏の海から漂ってくるこの地域独特の磯の香りをかいた瞬間などに、本校で十数年過ごしてきたかのような感覚が沸き立つことさえあります。

原子力系の大学院で博士後期課程を終えて以来、4年と11ヶ月間、自分が旧来から専門としてきた分野に固執することなく異分野(基本的には金属物性、生産工学)に首を突っ込み、研究畑を歩んできました。この間、研究の達成度と研究環境を鑑みて豊田工業大学、東北大学、東京大学(東海村)の順に活動の場を変えています。そのお蔭で、大学院を修了した当時の自分に不足していた知識と能力の幾分かを補うことができたのではないかと思います。私はこれまで、研究活動に充てる時間を十二分に持っていましたので、成果が使えるか?使えないか?という議論が初っ端にあるような分野においても基礎研究(現象のメカニズムや素過程を説明付ける)を重視し、応用研究と平行して推進することを心掛けてきました。基礎研究には、音波放射下で液体の定量安定付着保持(図参照)が可能となるメカニズムの解明、キャピテーションにより伝熱が促進される現象の評価や非晶質金属(原子が規則正しく配列されていない)を構成する極微細な構造についての一考察等があります。上記の成果を土台にした応用研究には、簡便に高品質な成型を可能とする新しい鋳造法、素早く高品質に被覆処理する技術、接合し難い材料の接合法や材料の表面改質法の開発があり、それらの内3件については、幸運にも所属学会から賞を頂くことができました。

さて、私の今後の研究活動の展開としましては、海洋環境の保全に寄与したいという思いから、これまでの趣向をガラリと変えて漁労機器用の生分解性潤滑油の環境負荷および耐磨耗特性の評価を行うことを第一に考えています。まだ、取り組み始めたばかりですが、水産に根ざした本校ならではの研究として、基礎・応用の両面とも大いに発展させて行きたいと思っております。今後とも、ご支援、ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

「平成20年度日本水産学会水産学奨励賞」受賞のご報告

食品科学科 助教 福島 英 登

先日開催されました平成20年度日本水産学会春季大会におきまして、「魚類ミオシンの加熱ゲル形成能に関するタンパク質工学的研究」という研究タイトルで、水産学奨励賞をいただきました。この賞は日本水産学会が「研究に精進し、将来の発展が期待される37歳以下の者」を対象に授与するものです。学生時代からメインの研究と位置付けていたも



円柱型の音波放射器端面で安定に付着保持されている水

のがこのような評価を受け大変嬉しく思っています。今後の研究・教育活動の励みにしていきたいと考えています。この研究は魚肉の加熱ゲルに関する基礎的な研究でしたが、現在それを応用した研究を福田教授はじめ、食品科学科の先生方と行っていますのでこの場をお借りしてご紹介致します。

「山口県を代表する魚種であるエソの冷凍すり身化」

九州、四国、中国地方などで漁獲されるエソ類は、鮮魚は良質なかまぼこ原料となりますが、凍結するとタンパク質を変性させるフォルムアルデヒド(FA)が発生し、かまぼこの原料として不適になります。エソ肉からFAを取り除く水晒し条件やFAを発生しない冷凍貯蔵の温度域を明らかにすることで、エソの冷凍すり身化による長期保存を目指しています。

「魚油をすり身に乳化させた乳化すり身の開発」

動脈硬化症、アレルギーなど生活習慣病の予防と治療に効果のあるEPA(エイコサペンタエン酸)・DHA(ドコサヘキサエン酸)を魚肉に乳化させた「乳化すり身」の開発、同すり身を製造するための「機械装置」の開発、及び乳化すり身を用いた機能性の高い「介護食、医療食、一般食品」の開発を目的としています。



また、ゲル化食品の他にも研究対象を広げ、マグロなどの大型魚にみられる異常肉である「ヤケ肉」現象の解明や、魚介類が保持している絶食に対する多様な機能を有効に利用し、高品質生産技術に結び付ける「短期蓄養」の技術開発などに取り組んでいます。こうした研究の概要は食品科学科HP(<http://www.fish-u.ac.jp/food/>)に記載されています。ご興味を持たれた方は覗いてみて下さい。

増殖学会賞受賞の光栄に浴して

生物生産学科 教授 高橋 幸 則

去る3月28日に、日本水産増殖学会より身に余る学会賞を賜りました。受賞の対象となった「エビ類の感染症とその防疫対策に関する研究」に従事した教員は3名、また直接・間接的に携わった学生は120名に及び、これらの人達の地道な研究努力が評価されたものと、関係者とともに喜んでいる次第です。

本研究の過程を振り返りますと、私が赴任した昭和56年に、クルマエビ養殖協会の方々が研究室に來られ、3年ほど前から原因不明の伝染病が発生し、大きな被害を受けているので何とかしてほしいという要望があり、このことが切っ掛けとなって研究が始まりました。翌57年に西日本各地で大量死したクルマエビから新種の病原菌を発見することができ、その翌年から本病の防疫対策に関する研究に

着手しました。まず、潜砂習性をもつクルマエビの底質環境に着目し、病気の発生が多い養殖池の砂とエビの免疫機能の関係を調べたところ、COD値が高く、酸化還元電位の低い底質で飼育されたエビの血球は、侵入してきた病原菌を処理できないことがわかりました。そこで、エビの収穫後には池を干して、池底を耕耘することを提唱し、業界への普及活動を行いました。また、スエヒロタケというキノコから抽出したβ-グルカンやピフィズス菌から単離したペプチドグリカンを与えると、免疫機能が活性化され、病気が予防できることを明らかにし、これらの総合的対策の普及によって、本病はほとんど発生しなくなりました。ところが安心したのも束の間、平成5年の春には、中国から輸入したクルマエビの種苗が殻に白点を伴って大量死し、この病気が国内産の成エビに伝染して、7000万尾のエビが死亡するという壊滅的被害を受けました。研究室の総力を挙げて原因の究明に取り組んだ結果、直径が130nm、長さが400nmの新種のウイルスが発見できましたので、すぐさま防疫対策に関する研究を開始しました。その後の研究によって、本ウイルスは塩素、熱湯、乾燥などによって容易に死滅するが、親エビや養殖池及び飼育水中の野生甲殻類が



キャリアーとなって病気を伝染させていることがわかりました。そこで、研究室で開発したウイルスのDNA鑑定法(PCR法)によって親エビを検査し、ウイルスをもっていない親から種苗生産を行うとともに、塩素によってタンク、養殖池及び飼育水を消毒し、野生の甲殻類を駆除したのちに稚エビを飼育したところ、7年間にわたって大量死をもたらしたウイルス病が終息しました。

このような成果を挙げることができ、さらに当研究室一同が受賞できましたことは、生物生産学科の先生方をはじめ、多くの職員の方々のご支援によるものと、本紙面をお借りして厚く御礼を申し上げます。

在校生の声

私にとっての水産情報(流通)経営学科の魅力

水産情報経営学科3年 仲西 顕太

私は2年時に水産経済学を受講して、流通分野の勉強に非常に興味を持った。水産食品流通経済論という専門科目では、伯父が経営している直売所でのアルバイト経験に似た内容が多く、授業後に先生に質問に行くことがよくある。さらに、実際的にも社会がどういう風に動いているかを知るために、伯父について行き、魚市場での魚の取引や卸売業者の小売店への販売を直接、見る機会も持った。長期の休暇中の直売所でのアルバイトでは、水産物や野菜といった商品の安全性がいかにかに消費者に求められているかを感じた。また、今日の流通変化がなぜ生じているかの一部を知ることができた。

今日の水産物流通はどうあるべきなのかといったことを考えるのも楽しいが、この経験をもとに、安全な商品を消費者にどう供給していくかについても考えていきたい。そのためには、具体的な魚の傷みややすさや冷蔵状態による日持ち日数の違いなども勉強していこうと思う。

水産のスペシャリストになりたい

海洋生産管理学科1年 道野 純平

私は、中学校の頃から海で泳いだり釣りをしたりと、海で活動するのが好きでした。水産について、さまざまな視点から多くのことを深く知りたいと思い、海洋生産管理学科を選びました。そして、今こうして大学生生活の一步を歩みだしたばかりです。水

産大学校はキャンパスが海に面していることもあり、実習以外にも同級生と海に遊びに行くなど、日々海と接する機会が増え、ますます海や水産に興味を持つようになりました。現在は入学してから初めての学期で、水産に関する専門科目を理解するうえで必要な一般教養科目を主体とした講義を受講しています。これまで苦手であった科目も、専門科目を理解するうえで必要なことを知り、今克服しようと頑張っています。これから大学での講義や実習を通じて、水産に関する知識・技術を身に付け、将来は水産のスペシャリストとして活躍できるようになりたいと思っています。

水産大学校に来て

海洋機械工学科2年 赤波江 一斗

私は、大学受験時いろいろな大学を受験しました。正直、水産大学校が第一志望ではなかったので、水産大学校への進学については迷った時期もありました。

しかし、講義を受けていくにつれて、その考えが変わっていきました。元々自分が学びたかった機械系のことを学べる上に、環境のことや水産のことを学べ、他大学の機械系学科と違って、幅広い物の考え方や学問を学ぶことができ、今では水産大学校に来て非常に良かったと思えるようになりました。

学校が海に囲まれているので、釣りや、部活を楽しみながらやることができ、充実した日々を送っています。今後の授業や実習も、乗船実習などがあるので非常に楽しみです。残る学生生活、充実した水大ライフを送っていきたくて考えています。

水産大学校三年生になって

食品科学科3年 前田祥孝・中里祐太

皆さんこんにちは！僕たちは食品科学科の三年生です。三年生になると様々な食品に関する専門的な講義や実験が増えてきます。実験では、機器を用いて食品に含まれている様々な成分の分析を行う機器分析実験や生物化学実験、他には、実際に食品を用いて行う食品分析実験がありました。三年生の後期には練習船に乗って魚の取り扱いと鮮度の関係を学ぶ洋上鮮度管理実習もあります。また、今年度から、「水産食品士」という水産大学校独自の資格修得にもチャレンジしています。その調理実習では、アジなどの色々な魚をさばくことができ勉強になりました。学校生活では、ラグビー部と野球部に所属して、充実した学校生活をすごしています。来年になると就職活動が本格的に始まりますが、これらの専門知識を活かして頑張りたいと思います。



「海が好き」だから

生物生産学科1年 畑中 妙子

生物が好き。魚が好き。そして、海が好き。とにかく好きなことを学びたいと思って、この水大にきました。

「普通の大学とは違うからなあ」と勝手に不安がっていたけれど、友だちもたくさんできたし、部活などを通して先輩方にもお世話になっています。

毎日が充実して、楽しいです。少し前までホテルを見ることができました。海に潜れば可愛いウミウシがたくさんいます。夜になれば星がきれいです。東京の大学に行っていたら絶対にできないことをたくさん経験しました。

授業はまだ一般教養ばかりで少し大変。はやく専門の授業をもっと受けてみたいです。実習や乗船も本当に楽しみです。

入学してからもうすぐ4ヵ月。あっという間に時間がたっていきます。どうしてもなく田舎でいろいろ不便なことはあるけれど、学びたいことを学べる、この恵まれた環境で過ごせる4年間を大事にしていきたいと思っています。

私の研究生活

水産学研究所2年 榎本 剛志

みなさんが御存知のマガキは、冬場の鍋の材料やカキフライ等でお馴染みであり、誰もが一度は口にしたことのある食材ではないかと思います。マガキは広島県、宮城県など全国各地の沿岸海域で養殖が行われています。

私は、そのようなマガキ養殖場がある唐津湾と博多湾のマガキの餌環境を明らかにする研究を行っています。具体的には、隔月毎に漁業者の方々に協力して頂きながら現場調査を行い、水温・塩分等の水質環境の調査や、マガキの餌となる懸濁物質やクロフィル計による連続観測を行っています。

サンプル処理や分析のために、どうしても夜遅くまで作業をしなければならないこともあります。けれども、「海」という自然の中で潮風に当たりながらの調査はとても気持ちが良く、そのような苦勞を忘れさせてくれます。

今後、それぞれの湾の比較やマガキの餌環境についてさらに詳しく検討していく予定です。そして、私の研究が少しでもマガキ養殖の役に立てればと思っています。

クラブ紹介

アクラス（水の生き物研究会）

前部長、食品科学科4年 兼 森 史 依

アクラス（水の生き物研究会）はもともと淡水魚好きの先輩方が集まって出来たサークルでしたが、現在は部員30名ほどのクラブになっています。主な活動としては、週1回生協二階に展示している水槽のレイアウトや掃除、毎年6月にある水道局が主催する水道展や吉見支所が主催する水辺の教室への参加、大学付近の川や海での生き物採集をしています。実際に自分たちで採集をして生き物に触れる中で、採集の仕方や生き物の名前を知っていけるのがアクラスの良いところだと思います。

そして去年からは下関市役所の環境課が夏休みに主催する親子教室にボランティアとして参加して、下関市内の小学生と水辺の生き物採集、野鳥観察などをしました。この活動を通じて多方面で活動され

ている方々と話す機会があり、鳥や植物の名前や生態など小学生と一緒にたくさん事を質問でき、私たちにとっても良い勉強になりました。

今年からは、アクラスが主体となって水辺の教室をしてほしいと下関市役所から依頼をうけ、環境リーダー養成講座に部員全員で参加しました。講座では、子どもとの安全な採集の仕方やコミュニケーションのとり方を学び、実際に活動されている方々の話も聞きました。そして去年の夏からの活動が評価され、3月に下関市長から感謝状をいただきました。

水辺の教室を通して、小学生と一緒に活動していく中で生き物を採集する楽しさや生き物に触れる楽しさを伝えていきたいです。また、私たち自身も子供たちと活動する楽しさや教える難しさを体験していく中で、成長していきたいです。

学生部だより

平成19年度における就職対策と進路状況について

学生部長(就職対策検討委員長) 前田 和幸

本校では学内に「就職対策検討委員会」を設置して学生の就職支援を行っています。委員会は、委員長(学生部長)と各学科長及び1年生～3年生のクラス担当教員からなる委員で構成され、事務局として学生課がこれを補佐しています。

主な活動は、(1)3年生を対象とした自己分析・自己発見のための職務適性テストを含む専門講師による就職ガイダンスの開催。(2)就職手引き書「大学生のための就職応援ブック」を3年生全員に配布し、これを用いた就職指導を行う。(3)各学科の就職担当者及び学生部職員が、水産関連会社・団体等を訪問し、本校及び本校学生の紹介を行うとともに、企業

等の採用情報を把握する。(4)毎年1月末に、合同企業説明会を実施。等です。特に、今年の1月26日(土)に開催された、本科3年生と専攻科進学予定の4年生及び研究科1年生を対象とした合同企業説明会には、採用実績のある企業68社の参加がありました。出席した学生数は214名で、対象とした学生のほとんどが出席しました。

このような活動の結果、平成19年度卒業・修了者234名(本科181名、専攻科37名、研究科16名)の就職率は98.2%でした。この内、水産関連分野に76.2%が就職し、昨年度の就職率94.5%(水産分野75.4%)に引き続き高い就職率を維持しています。

なお、本科、専攻科、研究科における進路状況及び進学・就職内定先は別表のとおりです。

平成19年度卒業・修了者の進路状況

平成20年3月31日現在

本 専 攻 科 研 究 科	卒業 者 数	進学関係					水産関連分野								そ の 他 分 野	(1) 水 産 関 連 就 職 率	(2) 就 職 率					
		大 学 院	研 究 科	専 攻 科	研 究 生 等	計	国 家 公 務 員	地 方 公 務 員	各 種 団 体	漁 業 ・ 養 殖	水 産 加 工	水 産 流 通	調 査 開 発 等	資 機 材 供 給 等				計				
水産情報経営学科	男	16				2	2								2	6		3	11	2	84.6	92.9
	女	3																1	1	1	50.0	66.7
	計	19				2	2											4	12	3	80.0	88.2
海洋生産管理学科	男	28			13	13			5	1	2	4						1	13	2	86.7	100.0
	女	3			3	3													0		-	-
	計	31			16	16			5	1	2	4						1	13	2	86.7	100.0
海洋機械工学科	男	30	1	1	17	19			1		1							8	10	1	90.9	100.0
	女	5		1	3	4													1		100.0	100.0
	計	35	1	2	20	23			1		1	1						8	11	1	91.7	100.0
食品科学科	男	29	1	10		1	12	1			1	6	3						11	6	64.7	100.0
	女	20		1		1					2	9	2					2	15	3	83.3	94.7
	計	49	1	11		1	13	1			2	15	5					2	26	9	74.3	97.2
生物生産学科	男	41	2	6		2	10		1	4	1	9	5					3	23	7	76.7	96.8
	女	6										1						1	2	4	33.3	100.0
	計	47	2	6		2	10		1	4	1	10	5					4	25	11	69.4	97.3
計	男	144	4	17	30	5	56	1	1	10	5	18	18					15	68	18	79.1	97.7
	女	37		2	6		8			2		10	3					4	19	8	70.4	93.1
	計	181	4	19	36	5	64	1	1	12	5	28	21					19	87	26	77.0	96.6
専攻科船舶運航課程	男	15								1	2		1	5	1	2			12	3	80.0	100.0
	女	1																	0	1	0.0	100.0
	計	16								1	2		1	5	1	2			12	4	75.0	100.0
専攻科船用機関課程	男	19								1			6	1	4				12	7	63.2	100.0
	女	2											2						2		100.0	100.0
	計	21								1			8	1	4				14	7	66.7	100.0
計	男	34								2	2		1	11	2	6			24	10	70.6	100.0
	女	3												2					2	1	66.7	100.0
	計	37								2	2		1	13	2	6			26	11	70.3	100.0
研 究 科	男	12	1				1					2	1	2	5				10	1	90.9	100.0
	女	4	1				1					2							2	1	50.0	100.0
	計	16	2				2					4	1	2	5				12	2	85.7	100.0
総 合 計	男	190	5	17	30	5	57	1	3	12	5	21	30	4	26				102	29	77.9	98.5
	女	44	1	2	6		9			2		12	5		4				23	10	69.7	97.1
	計	234	6	19	36	5	66	1	3	14	5	33	35	4	30				125	39	76.2	98.2

注：(1)(水産関連)÷(就職内定者) (2)(内定者)÷(就職希望者)

【分類内訳】
 水産関連 各種団体：水産に関係する団体(漁業、流通、船舶等関係団体)
 漁業・養殖：水産動植物の採捕又は養殖の事業者等
 水産加工：水産動植物を原料又は材料として、食料、肥料その他の有用物を生産する事業者
 水産流通：水産物の貯蔵、運搬、販売等の流通に関する事業者
 海洋水産・調査開発等：海洋水産関連の調査会社
 資機材供給等：水産業やそのサービス部門等に資機材供給等を行う関連事業者等
 その他：水産業関連以外(公務員・団体・企業)

平成19年度卒業生進学・就職状況一覧表

平成20年3月31日現在

◎進学(大学院等)	武蔵野フーズ	大東魚類	日本サルヴェージ
北海道大学大学院	かね徳	ヤマエ久野	カイジョー
東北大学大学院	若菜	築地水産	太平電業
東京海洋大学大学院	丸ケー食品	三徳船舶	東京計装
広島大学大学院	武蔵野	八馬汽船	太陽日酸
水産大学校研究科	東海澱粉	太洋日本汽船	シマノ
◎就職(官公庁)	久世	阪九フェリー	日正汽船
厚生労働省	アンデルセン	川崎汽船	美須賀海運
山口県柳井市役所	やずや	ダイトーコーポレーション	親和海運
鳥取県職員	田中食品工業所	日本郵船	出光タンカー
茨城県立海洋高等学校	オリエンタルフーズ	商船三井	飯野海運
兵庫県警	昔亭	川崎近海汽船	第一中央汽船
広島県警	オーカワ	JR九州高速船	アネムホールディングス
福岡県警	西野物産	NTTワールドエンジニアリング	富士通FIP
自衛隊	林兼産業	日本海洋事業	UCC上島珈琲
三田消防署	おたふくソース	中外テクノス	アキタ
中野市役所	マリンフーズ	西日本科学技術研究所	カゴメラビオ
◎水産関係等各種団体	極洋	山口銀行	山口トヨベツト
日本海事検定協会	金子産業	尾道造船	日本クランクコルク
日本小型船舶検査機構	理研ビタミン	神戸YMCA	肥後銀行
山口県漁業共済組合連合会	フードサプライジャスコ	CACマルハシステムズ	吉田SKT
山口県漁船保険組合	ニチロ	がまかつ	山野井
福岡生活協同組合	日本水産	ニッスイマリン工業	アルタックフーズ
日本冷凍食品検査協会	広島中央魚市場	日新興業	アドアース
香川県漁業協同組合	横浜冷凍	西島製作所	アマーチ
全国漁業協同組合連合会	大阪魚市場	阪神内燃機	ソニー太陽
新日本検定協会	中部水産	日阪製作所	リョーエイ
◎民間企業	中央魚類	TAIYO	JTB
拓洋	福井中央魚市場	常石造船	ワイディシイ
宝幸水産	大一	郵船商事	日野電子
大洋エーアンドエフ	大阪魚市	前川製作所	エム・オー・ケーブルシップ
坂本飼料	ニチレイロジスツテクス	大和製缶	タカナシ乳業
いわきコーポレーション	丸菱	大阪ウオーターフロント開発	サイバース
マルタイ	恒栄商事	太陽建機レンタル	
日本食研	健康家族	宇部興産	
信田缶詰	マリンポリス	ヤンマーエンジニアリング	
タカノブ食品	コタベ	商船三井テクノトレード	

順不同

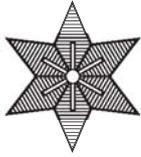
平成20年度入試状況

本校の平成20年度入試状況をお知らせします。

推薦・一般入試の志願者総数は559名で、昨年度より220名減少しました。昨年11月に実施された推薦入試には、全学科で106名の応募がありました。また、今年2月に実施された一般入試には全学科で453名の応募がありました。一般入試の学科別応募状況は、水産流通経営学科(平成20年度より学科名変更)30名(募集人員12名に対する倍率2.5倍)、海洋生産管理学科63名(募集人員23名に対する倍率2.7倍)、海洋機械工学科57名(募集人員23名に対する倍率2.5倍)、食品科学科94名(募集人員32名に対する倍率2.9倍)、生物生産学

科209名(募集人員18名に対する倍率11.6倍)でした。

一般入試の過去5年間の推移は、16年度962名、17年度935名、18年度634名、19年度636名でしたので、これまでと比較すると大幅に減少しました。これは、独立行政法人の統廃合が世間で話題になったことも原因の一つと考えられます。この対策として、平成21年度入試では、①福岡試験場の増設、②物理の出題範囲をI・IIからIとする、③推薦入試のC制度を全学科で実施するなどの受験生確保のための改善を図るとともに、オープンキャンパス(8月23・24日)、高校訪問(約200校)や公開講座等の広報活動を通じて、受験生の確保に努めています。



水大学園だより

独立行政法人水産大学校 〒759-6595 下関市永田本町2丁目7-1 電話083(286)5111
ホームページ <http://www.fish-u.ac.jp/> [発行] 水産大学校 学生課

学生や親から選ばれる存在に

理事長 藤 英 俊



2008年はアメリカのサブプライム住宅ローン問題に端を発した世界経済の混乱が、様々な分野に波及し、資金が原油市場などに流れ込み、原油価格の高騰の一因となりました。ご承知の通り水産業界にも甚大な影響を与え、本校も例外ではなく、練習船の運航などにも少なからず影響を受け

ましたが、100年来の不況の嵐が来年度の新入生確保に影響が出ないことを願っております。

本校の平成20年度は、二つの大きな審査を受けたため教職員の皆様に膨大な書類作成にご尽力頂き、非常に過酷な1年であったのではないかと思います。第一に(独)大学評価・学位授与機構による5年に1度の審査年であり、この審査は、学生諸君に学位記(水産学士または水産学修士)を渡すために避けては通れない審査であります。次に、日本技術者教育認定機構(JABEE)の審査を受けました。本校がJABEEの認定を受けることは、高等教育機関として行っている教育の品質が、技術者教育のために満足されるレベルにあるか、水産技術者(水産人)として日本や世界で活躍するために必要な最低限度の知識や能力を養成するに足る十分な教育成果が得られているかについての評価となるものです。認定されれば技術士第一次試験が免除となりますが、それよりも本校の教育プログラムを履修して卒業した学生の質が社会的に保証されることになり、非常に意義あることです。この審査結果は、2009年5月以降になると思いますが、無事に認定されるものと信じております。

教育環境整備は、4月1日から新講義棟での授業を開始し、11月から海洋機械総合実験棟(平成21年度末完成予定)の建設に取りかかりました。完成

後は、海洋機械工学科の教育内容が益々充実するものと期待いたしております。

また、社会活動等は、7月2日には、ボランティア活動の動機付けの一環として、山口県水難救済会支援自動販売機を設置(売り上げの一部が青い羽根募金に寄付される)しました。7月12日には、明治学園中学高等学校(北九州市)、下関海洋科学アカデミー、本校の3者でSSHの協定式を行いました。スーパーサイエンスハイスクール(SSH)事業とは、文部科学省が科学技術、理科・数学教育を重点的に行う高等学校及び中高一貫教育校を指定し、将来の国際的な科学技術系人材の育成に資することを趣旨とするものです。

ここ数年、国・公・私立大学を問わず受験生確保競争は益々激しくなっております。18歳人口の減少、大学全入時代、都会一極集中という現象によるものか、本校も年々受験生が減少する傾向にあります。本校の受験生確保の対策は、福岡に受験会場を増設、本校のアピール、マスコミ等に取り上げられる研究の活性化や外部資金の獲得、シンポジウム開催や社会貢献など全学を挙げて積極的に取り組んでおります。その結果の一部はホームページに「平成20年度の水産大学校の新聞掲載記事」の項目を新設し、公開いたしておりますのでご確認頂ければ幸いです。

ところで、11月15日に本村紘治郎校長が満期退職され、16日付で山元憲一生物生産学科長が新校長に就任されました。新校長の下で新たな教育改革を進め、カリキュラム・教育制度を充実させ「学生や親から選ばれる存在」になるよう更なる向上に努めていきたいと考えております。

なにごとにも継続は力なりと言われますが、公の印刷物を発刊されることのご苦勞は計り知れないご苦勞があるとお察しいたします。この「水大学園だより」は教職員、学生や卒業生の声が聞かれる本校にとって情報を共有する重要な手段の一つですので、さらなる充実と発展を願っております。

最後になりましたが、藤石昭生氏(漁業学科9期・水産大学校名誉教授)が瑞宝小綬章を受章されましたことをご披露するとともに心からお慶び申し上げます。

最近の話題

着任のご挨拶

水産流通経営学科 助教 副 島 久 実

平成20年2月に本校に着任いたしました。私は

これまで、鹿児島大学水産学部を卒業した後、平成18年3月に広島大学大学院の博士課程後期を修了、続く4～6月は兵庫県庁水産課に、7月からの1年半は(独)水産総合研究センター中央水産研究所水産経済部に勤務いたしました。これまでバタバタと

駆け抜けて参りましたが、その中でも多くの方々に出会い、様々なことを教えていただきました。皆様には心から感謝しております。

私は、近年の国内漁業生産の縮小後退、水産物輸入の増加、水産物消費の変容など、日本漁業を取り巻く市場再編とともに様々な問題が顕在化する中で、地域的な水産物の生産-流通-消費のネットワーク、つまり水産物の地域流通を構築していくことが、それらの問題を解決する可能性を有しているのではないかという考えから、水産物の産地市場や直売所、水産加工業、漁村女性起業などの現場に何度も足を運び、現地調査を積み重ね、それらをもとに理論化を試みようとしています。本校での私の担当科目は「水産物市場構造論」「水産物流通加工ビジネス論」「水産物調理加工実習」などですが、いずれも、これまで浅いながらも取り組んできた研究や調査経験を活かせる分野ですので、私自身楽しく取り組んでおります。

さて、本校に着任するまで、最近の大学生はどんな感じなのだろう……と多少の不安がありました。が、本校では、いかにも水産大学校！という感じの学生が多く、嬉しかったです。例えば、ある日の夕方、学生と一緒に港で釣りをしていると、あちらこちらから学生が釣竿とバケツを持って自分の夕食の食材を調達しに釣りにやってきたのを見た時には、驚くと同時にとても微笑ましく感じたのを覚えています。また、地域のさかな祭などのイベントにボランティアスタッフとして積極的に参加する学生も多く、現地の人と触れ合いながら楽しそうに仕事をしている学生たちの姿をみるととても嬉しくなります。同時に、このような学生を快く受け入れ、教室だけでは学べない勉強の場を与えてくださる地域の皆様にもただ感謝の限りです。



学生と一緒にイベントのお手伝い(2008年10月)。右下は道の駅救しーまーと駅長の中澤さか女氏、右上が本人。

最後になりましたが、これからも常に問題意識を持ちながら研究・教育に取り組み、そして少しでも社会貢献ができるよう精進していきたいと思っております。今後とも、ご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

練習船にのって

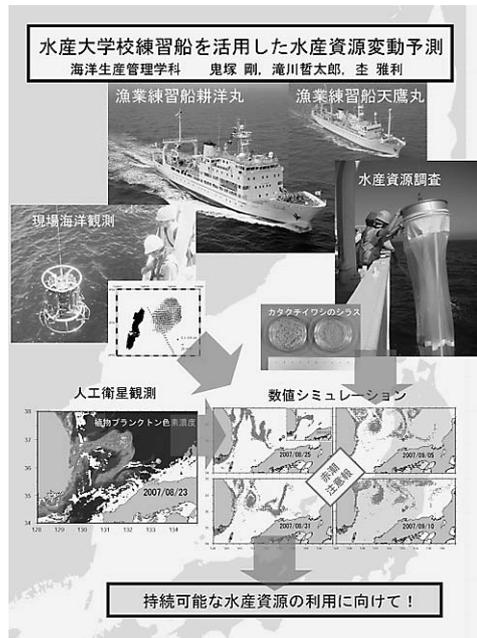
海洋生産管理学科 助教 滝川 哲太郎

2004年に私が本校に着任して以来、対馬海峡で

水産大学校練習船「天鷹丸」や「耕洋丸」を用いた調査研究が重点的に行なわれるようになりました。その主な背景には、中国大陸の急激な経済発展が東シナ海の海洋環境を変化させ、その変化が対馬海峡を経て日本海の漁場環境へ影響を与えることが懸念されており、対馬海峡で継続的に海洋環境のモニタリングを行うことが必要とされていました。当時、水産情報経営学科(現在、海洋生産管理学科)の鬼塚剛博士が名古屋大学地球水循環研究センターと共同で、対馬海峡における海洋環境調査(流れや水温・塩分、栄養塩、植物プランクトン等)を行うことを計画しており、その年に着任した私が、その計画に乗った形となりました。2006年からは、卵仔稚魚の専門科である海洋生産管理学科の杵雅利博士も加わり、物理・化学・生物学的手法による幅広い調査研究が行なわれています。

もともと、対馬海峡での現場海洋観測を行いたいという希望で、本校へ赴任してきたこともあり、頻繁に練習船(または研究船)に乗船します。2006年度は、年間8回も乗船しており、1回当りの乗船期間は1週間程度と短いとはいっても、我ながらよく乗船したなと思うところです。この調査の大部分は、練習船「天鷹丸」によって行なわれています。「天鷹丸」の水谷壮太郎船長、秦一浩首席一等航海士は、私が本校に赴任した当時からの付き合いになり、この調査研究の良き理解者です。船舶による調査研究は、乗組員の方々の協力によるところが大きく、心から感謝しております。また、この調査の殆どは、学生の乗船実習の一環として行なわれています。学生諸君には、地球環境問題に関連した最新の研究を肌で感じてもらえればと思うと同時に、物事を遂行するためには、協力しあえる仲間の大切さを学んで頂ければと思っています。

2008年10月29、30日に行われた農林水産省主催の「アグリビジネス創出フェア2008」で、この調査研究が紹介されました。最後に、そのパネルを添えて……



蒸気プラントを活用した研修について

海洋機械工学科 講師 一瀬 純 弥

本校海洋機械工学科船用機関システム講座は、昨年度から本年度にかけて、蒸気プラントを使用して、水産高校学生及び市内船用機器メーカー社員に対して研修を実施しました。蒸気プラント（ボイラ・蒸気タービンプラント）は、ガソリンエンジンやディーゼルエンジン等の内燃機関と違い、一般の方にはなじみが薄い外燃機関の一種で、火力・原子力発電プラントや大型船舶、また排熱回収発電システムなど、比較的大規模なパワースourceとして限られた場所で使用されている熱機関です。この研修の目的は、蒸気プラントの基礎と構成機器の構造、プラントの運転方法についての講習を通して、産学官連携による地域への貢献と人材の育成を図ることにあります。

本校の海技教育は、国土交通省より内燃機関三級海技士（機関）第一種養成施設の指定を受けています。現在の蒸気プラントは、昭和52年3月に海技士教育に必要な設備として設置されたものです。本機の特徴としては、取り扱いの実験・実習を実船に近い状態で行うことを目的としているので、蒸気発生源であるボイラが2胴水管型であること、蒸気タービンの出力が教育用設備としては国内でも最大規模であることが挙げられます。これまで、船用機関士を志す本校学生に対し、本機を用いて蒸気プラントの構成、それぞれの構成機器の役目と性能、プラントの立ち上げ、運転方法等についての理解を深めさせ、運転上のノウハウや知識を会得させるという教育を行ってきました。

今回の研修は、平成20年2月に山口県立水産高校（海洋技術科2年生14名）学生に対して行い、また、一般企業向けとして、平成20年7月に㈱日本無線電機サービス社（社員20名）に対して実施しました。午前中にボイラ・蒸気タービンサイクルの基本理論と構成についての講義を行い、午後は、現場でプラントと構成機器の構造、プラントの運転方法について説明を行った後、プラントを立ち上げる手順と運転操作についての実技講習を行いました。研修内容については、受講生の9割以上から「十分満足できる内容だった」「業務に応用できる」



社会人を受け入れての研修風景

等のアンケート回答を得ており、今回の研修は、大きな成果を挙げたと言えます。また、実習の際の説明方法等について貴重な意見を聞くことが出来、今後の研修を企画する上で良い参考になりました。

現在使用中の蒸気プラントは、平成21年度末には新しい船用機械総合実験棟の実習設備として、より実践教育に適した実習設備として生まれ変わる予定です。新しい船用機械総合実験棟には、蒸気プラント以外にも電気推進実験設備、海洋ロボット実験設備等が設置される予定であり、将来を見据えた高度な海技教育を行える施設として計画されています。山口県下には、船用・水産機器メーカーが数多展開しており、また、工業系高校や水産高校も設置されています。今後、新しい船用機械総合実験棟の設備を大いに活用し、大学校の海技教育の充実化はもちろんのこと、産学官連携を強力に推進し、現場（実機）を深く理解した上での「ものづくり技術」の更なる向上につなげて行きたいと考えています。今後とも、皆様のご理解とご協力のほど、宜しくお願い致します。

ボストン留学記

食品科学科 助教 古 下 学

この10月に1年の海外留学より戻って参りました。私の留学先は、アメリカのボストンにあるハーバード大学の関連病院 Brigham and Women's Hospital で、コレラ菌の研究で世界的に有名な Matthew K. Waldor 教授と研究を行いました。

ハーバード大学は、世界中のトップレベルの研究者が集まる大学であり、研究環境は非常に恵まれています。びっくりするくらい高価な機械や特殊な施設が日常的に使用できますし、研究者をサポートするサービスがしっかりしています。例えば、通勤バスはハーバード大学専用ですし、研究以外の各種手続き、研究機械の修理などはすべてオフィサーが迅速に対応してくれます。日本とのあまりの差に愕然としました。

研究室メンバーのレベルは非常に高く、真面目であり、常に白熱した議論がいたるところで沸き起こっています。しかし、仕事が終わると、仲間と食事や映画に出かけ人生を楽しむ姿勢に驚かされました。また、研究室はアメリカ人を初め、フランス、中国、スペインなど非常に多国籍でした。パーティーをすれば、各国ご自慢の料理を持ち寄ることもしばしばであり、アメリカにいながら様々な国文化に触れることが出来ました。

私の研究ですが、コレラ菌が持っている伝達性遺伝子の伝達メカニズムについて解析を行いました。少々難しいのですが、コレラ菌は自分の遺伝子の一部を他の細菌に伝達することが知られており、この伝達する遺伝子の上には病原性に関連している遺伝子が複数あります。この遺伝子が他の菌に移るということは、病原遺伝子も移るということであり、大問題です。私は、この遺伝子の伝達メカニズムを分子レベルで解明できる方法を開発しました。しか



し、まだ研究は始まったばかりであり、ハーバード大学との共同研究をすることになりました。

今回の留学は、理事長を初め皆様のご協力でご実現いたしました。今後、留学で得た知識、技術を水産大学校に少しでも還元できればと考えております。

水産分野における LED(発光ダイオード)の応用製品の開発研究に携わって

生物生産学科 講師 村瀬 昇

私が所属する生物生産学科資源環境学講座では、寿命が長く、低発熱、低消費電力で次世代の光源として注目されている LED(発光ダイオード)を用いて、水産分野での応用製品の開発に関わる基礎的研究を平成18~20年度にかけて実施してきました。この取り組みは、文部科学省の「知的クラスター創成事業」のうちの「やまぐち・うべ・メディカルイノベーション・クラスター構想」と称し、山口大学で開発された高輝度 LED 技術を基盤として、医療用光源システムの開発など医療分野に加え、県内の主要産業である農業、水産業および畜産業の分野において、産学官が連携して研究開発を行うものです。

この事業に参画した頃には、すでにイカ釣りなどの漁船に搭載する大型パネル方式の LED 集魚灯が開発され、実証試験が行われてきていました。私たちの講座では、先例とは逆に、小型で携行が容易な海中 LED 照明装置を開発し、それを魚礁や海底に取り付けて集魚効果の確認や漁業者による釣りの試験操業などを実施してきました。また、私の専門分野である海藻の生理生態学の観点からは、光質が異な



海中 LED 集魚灯に蝟集するマアジ
(2007年8月、島根県隠岐の島、水深約12m)

る LED 照射によって養殖対象種や藻場構成種の生長などに差があることを明らかにしてきました。

このように、私たちは、山口大学および県内外の企業との協働によっていくつかの基礎的な成果を得ることができました。一方、私個人が「産学官連携ならでは」と意識していたのは、「産」のスピードと「官」の商品化や新規事業化などの要望をキーワードとして研究開発を進めていくことでした。

水産業を取り巻く現状としては、近年の燃油高騰、温暖化の防止、漁業者の高齢化対策、また漁業生物資源の保護・育成などの面から大きな転換期を迎えています。例えば、今回開発した海中 LED 集魚灯は、省エネ効果だけでなく、選択性漁具との併用により資源管理型漁業への転換が可能です。また、海藻の増養殖においては、安全・安心な種苗を安定的に生産する照明装置として製品開発が期待できます。

練習船天鷹丸第171次航海(専攻科遠洋航海)

—SEAFDEC*1 国際共同調査—について

天鷹丸船長 水谷 壮太郎

練習船天鷹丸(国際総トン数:1,020トン)は、2008年5月15日から7月11日までの58日間、タイ湾、南シナ海及び東シナ海において、総航程8,182海里(約15,150km)の遠洋航海実習を行いました。乗船実習生は、専攻科船舶運航課程生17名(うち女子学生3名)と同科船用機関課程生20名(うち女子学生3名)の計37名でした。乗船学生に対し、本科(4ヶ年)において修得した課程の上に、更に精深な専門的学識を修め、高度の専門技能を修得することを目的に、航海当直、天測*2、出入港操船、狭視界操船、荒天操船、サンゴ礁海域・河川などの特殊海域操船、気象観測、船体整備、非常部署、機関運転、機関制御並びに整備実習など船舶運航に関する講義及び実習のほか、タイ湾、東シナ海海域において海洋環境観測実習及び底びきトロール・中層トロール漁業実習を行い、新時代の水産界を担う漁業生産技術者・船舶運航技術者並びに水産関連技術者・船用機関技術者としての専門技能を習得させました。

また、本校と SEAFDEC とで、平成17年5月に締結された学術交流協定により、今年5月31日から6月6日までの7日間、Gulf of Thailand(タイ湾)において、タイ王国水産局研究員5名、SEAFDEC 訓練部局調査員1名、本校海洋生産管理学科教員3名並びに研究科生1名が乗船専攻科生とともに、計量魚群探知機による水中音響調査を主体として、6ライン・12観測定点において、CTD 観測による海洋環境(水温、塩分、溶存酸素量などの鉛直分布)観測並びに中層トロール網・底層トロール網による魚類採集を実施し、同湾中央部の漁業資源共同調査を行いました。

バンコック(タイ王国)寄港中には、着岸した SEAFDEC 訓練部局の施設見学のほか、カセサート大学水産学部海洋科学科学生・教員等44名が来船し、本校の概要と乗船実習について説明後、船内

見学と乗船学生との交流会を実施しました。訓練部局の広場や体育館では、SEAFDEC 職員、訓練生と一緒にフットサル、チェアボール、バドミントンなどのスポーツで汗を流しました。さらに船上レセプションを開催し、タイ国農業協同省水産部次長、同部海洋水産研究開発局長、SEAFDEC 事務局長、同局次長、JICA タイ国駐在事務所長、カセサート大学水産学部海洋科学部長、チュラロンコン大学海洋科学部長、在タイ日本国大使館職員ほか54名が来船し盛会裏に終え、国際親善交流を行うことができました。

また、寄港地の那覇からは海洋生産管理学科教員2名、生物生産学科教員1名ほか調査員3名が乗船して、エチゼンクラゲの我が国沿岸への来遊過程を解明するための調査を東シナ海から対馬海峡周辺海域まで実施し、目視、CTD 観測のほか、底層トロール網・中層トロール網によるクラゲ採集を試みましたが、1個体も発見・採集されませんでした。

SEAFDEC との共同調査は、マレーシア国サラワク州沖、昨年のブルネイ国沖に続き3回目となりました。今後も練習船を利用した国際共同調査が継続されて、学生の国際的感覚が養われると共に、国境を越えて学生同士の交流もより一層発展して行くことになると思います。

練習船の役割、利用について、ご父兄の皆様方にもご理解とご協力をお願いしたいと思います。インターネットの本校ホームページに練習船コーナーが

あり、航海予定や航海状況を航海概要文や写真でお知らせしています。

(ホームページ <http://www.fish-u.ac.jp/>)

*1 SEAFDEC：東南アジア漁業開発センター、1967年設立、ASEAN 諸国10ヵ国加盟、①事務局(タイ) ②訓練部局 TD(タイ) ③海洋水産調査部局 MFRD(シンガポール) ④養殖部局 AQD(フィリピン) ⑤海洋水産資源開発管理部局 MFRDMD(マレーシア)の5部局で構成されている。

*2 天測：六分儀を使用して太陽や恒星の高度を観測して船の位置を算出すること。GPS 航海の時代になっても位置算出の基本は大切。位置算出原理は同様である。



天測実習の様子
(太陽下辺高度観測)



タイ王宮の見学

就職活動

自分探しの旅行

水産情報経営学科4年 堀田 陽太郎

私は、水産大学校に入学以前から将来はこういう職業に就きたいという自分なりの構想というのを描いていました。そして学生生活の中でその仕事に関わるアルバイト経験もしてきました。その中で社会人としてのマナー、モラルを学んだり、多くの営業マンと接し多くのことを吸収することができました。そしていざ、就職活動をする中で多くの壁にぶつかりました。そして、そのことを考える中で先輩や先生から客観的な意見を聞くとみんな同じ声が聞こえてきました。その後、それを気をつけながら面接に取り組むと少しずつ面接に通過できるようになり、当初行きたいと思っていた業界ではありませんが早いうちに内定を頂きました。今、就職活動を振り返ると苦労はしましたが、多くの人と接したりすることで、自分の欠点や自分で判断し行動することで多くの可能性を見つけることができ社会人になるためのスタートに立てたと思います。自分のつきたい職業には就けませんでしたが無らかの形で関わり社会には貢献したいと思います。

就職活動を振り返って

海洋生産管理学科4年 光 永 紘子

私は3年生の11月から就職活動を始めました。

当初は水産関係以外の会社も視野に入れて活動していましたが、他の職種を見ても一生続けるだけの情熱を傾けることができず、やはり3年間大学で学んだ水産分野が一番自分に合っているのだと感じました。

就職活動で一番悩んだことは、入りたい会社に如何に自分をアピールできるかという点でした。この問題を克服するにあたり、まず自分のセールスポイントと弱点を見つめ直すことから始めました。次に、就職活動中の他人の行動を観察しました。ここでは面接等で特に印象の良い人の行動や態度に注目することで、自分に足りないものや自分の考えを明確に伝えるコミュニケーション能力の重要性を学びました。面接では常に笑顔で挨拶し大きな声ではっきり話すことを心掛けました。しかし、本番では常に大きな声で挨拶や話ができなかった訳ではありません。ただでさえ緊張する状況の中で普段慣れない事をするとパニックに陥ってしまいます。そのため、私は明るく元気に挨拶することを常日頃から意識し心掛け、希望する会社から内定を頂きました。

最後に後輩の皆さんへ。就職活動では自分の意識の持ち方次第で自分を変えることが出来ます。自分で生きる道ですから納得して進んでいって下さい。

就職活動を終えて

海洋機械工学科4年 竹内 健祐

私は、就職活動を3年生の11月に始めたので

すが、“ここに就職したい”、“こんなことがやりたい”といった明確な目標を設定していませんでした。なんとかなるだろうという安易な気持ちでダラダラとやっていました。

しかし、年が明けてから、本校で開催された合同企業説明会に参加したことがきっかけで、就職活動に本格的に取り組み始めました。それからは、真剣に自己分析を行い、就きたい仕事の範囲を絞るとともに自分なりに会社研究を行うようになりました。緻密な自己分析はエントリーシートの作成や面接試験に対処する上で重要なものとなります。私がかんなに自分を掘り下げて、客観的かつ積極的に自己の強みや弱みなどを分析したことは、それまでにありませんでした。

やがて、水処理や水事業など、水関連の仕事に興味を持つようになり、三浦工業を受けることを決意しました。個人面接や集団面接、筆記試験を無事通過し、最終的に内定を頂いたときは嬉しかったです。約7ヶ月間の就職活動を通して、少しは成長したような気がします。

数多の会社がある中で、自分に合った会社と出会うのは難しいことかもしれません。しかし、後輩の皆さんも自分の納得がいくまで、就職活動しきって欲しいと思います。

就職活動は自分を見つめ直すよい機会

食品科学科4年 垣内良康

私が本格的に就職活動を始めたのは冬休みが終わってからでした。私は食品科学科に入学した時から食品会社に就職したいと思っていたので、食品会社を中心に就職活動をしました。就職活動を行っていく中で感じたことは、やはり水産大学校は水産分野においてとても強みを持つ学校であることがわかりました。

就職活動を始めたころは右も左も全くわからなくて、今思うともっと早く行動をしていればと後悔しています。「自己PRって何？エントリーシートって？SPIとは？」まずは就職活動を理解するだけで時間がかかり、それだけ他の人に後れを取ってしまいました。就職説明会や選考会に行くのも費用がかかるし、面接においても自分の言いたいことをうまく伝えられず悩んだりもしました。しかし、何度も面接をこなしていくうちに徐々に緊張することもなくなり、自分の思っていることを担当者に伝えられるようになりました。面接において重要なことはやる気と熱意を会社に伝えることだと思います。そして、就職活動というのはある意味、会社との縁みたいなものもあると感じました。結局、私は3社から内定を頂くことができました。先生方や、友達の助けがあったからこそうまく就職活動ができたことと感謝しています。2月から6月まで就職活動を行いました。今までの自分を見つめ直すよい機会になったと思います。また、社会に出る前の準備として、就職活動の終わりのころには自分の成長を実感しました。

最後に、後輩の皆さんには、就職活動で失敗しても決してめげずにポジティブに考え、納得のいく就

職活動を行って欲しいと思います。

私の就職活動

生物生産学科4年 横塚哲也

私は子供の頃から魚に興味があり、将来は地元である栃木県の水産業に携わりたいという夢がありました。そして大学3年になり、就職の事を考えるようになった時に、夢を叶える為に栃木県の地方上級試験を受験して公務員になろうと決心しました。ですが難易度の高い筆記試験、面接や論文と公務員試験への道のりはそう易しいものではなく、就職活動と並行して行えるかどうか非常に悩んだ時期がありました。そんな時、親から一通の手紙が届きました。「やる前からビビるな。自信を持ってぶち当たれ。もし落ちたらフリーターでも何でもいい。」この言葉のおかげで決心が付き、公務員試験1本に絞ることが出来ました。そして研究室の先生方を初め、先輩方や小学校の先生のご協力により見事合格し、夢を叶えることが出来ました。応援して下さいたくさんの方々に心からお礼を言いたいです。そして「自分を信じる事」を教えてくれた両親にありがとうと言いたいです。

女子学生の専攻科進学と就職活動

専攻科船舶運航課程 仲里慧子
南 栞 真奈美
岸 本 梓

水産大学校に入学して船に乗ることを考えていなかった私たち女子学生3人の専攻科進学と就職活動について述べたいと思います。

仲里です。高校の時から地理が好きで、海流や風による世界の気候、それによる世界の第一次産業の勉強に興味がありました。大学では食料自給、それとともに気候や海流現象の研究がしたいと考えていました。しかし、入学してすぐ父に「大学4年+1年で資格がもらえるなら、行ってみたら？」と言われて、3、4年になったら進路を考えようと頭を切り替えました。乗船実習を2年、3年と経験し、専攻科進学を序々に決めていきました。4年の遠洋航海でマグロ延縄実習をし、きつい2週間でしたが、「水産業にかかわりたい。」と感じました。しかし、海洋調査船への女子の就職は厳しく、船に就職することより、水産関係の陸勤でも良いと思っていました。そうした中、運よく海洋調査のできる三重大学の練習船勢水丸で航海士の就職が決まりました。今考えてみると、航海士になることは入学時から想定外でしたが、第一次産業、食料自給についての研究をするということからはブレなかったです。

南栞です。小学生の時から海が好きで、水産大学校に入学しました。女子端艇(カッター)部に入部したことで、フェリーの船橋の見学や、船で働く人と話をする機会が何度かありました。そのためか、就職について考えた時に、私は船に乗っている自分の姿が一番イメージできました。いくつかの会社を

訪問していくうちに、航海士という仕事により興味をもつようにもなりました。女の子には難しい仕事だと言われることもあったので、船で働けるならどこでもいいという気持ちで就職活動をしましたが、思ったよりも受け入れてくれそうな会社はたくさんありました。私は大学校生活で、海をこんなに近くに感じられただけでも幸せでしたが、海上職の内定(日本郵船株)まで頂けて、とても幸せに思います。

岸本です。専攻科に進んだ理由は、1年生の時、耕洋丸の遠洋航海出港にカッターで見送りをしたときに廻ります。出港していく先輩たちがカッコよく、「私もあの場所にいたい!」と思いました。その時初めて専攻科への進学について意識しました。ある先生に「専攻科に進学したからといって船だけが就職口ではない。むしろ陸上+海上で就職口は広がる。」その言葉で私は専攻科進学を決めました。

3年生の後半からは船会社・水産企業の説明会やセミナーに参加しましたが、入社したい会社が見つかりませんでした。4年生になりついに



憧れの遠洋航海を無事に何とかこなして日本に帰ってきました。その後の内航中に私と同じように専攻科に進学して陸上職に就いた先輩に株ユニエックスを紹介して頂きました。普通は「専攻科進学」＝「航海士への道」だと思います。私は専攻科への進学の理由が遠洋航海の憧れと先生の言葉なのでその考えが頭の中になく、海事関連の陸上職で自分が働きたいと思う会社を選びました。

大 学 祭

海燕祭を振り返って

2008年大学祭実行委員長 (生物生産学科3年)
藤原 佑典

私たち大学祭実行委員会が活動を始めたのは4月でした。今年のテーマとサブタイトルを決めることから始めて、新入生からも2・3年生からもたくさんの意見が出ました。

水産大がどのような研究や活動をしているのかを地域の人々にも知って頂きたく思い、例年同様、教職員による公開講座を1日目に同時開催したこともあり、大盛況でした。2日目には、恒例となっている吉本興業のお笑いライブで、たくさんの来場者の皆様楽しんで頂くことができ本当に嬉しかったです。

今年も、子供たちを対象とした「ミニゲームコーナー」や「宝探し」を企画し、喜んで頂いている姿

を見ると企画して良かったと思いました。

また、私たちは地域の様々な祭典(馬関祭り、海峡花火大会、吉見地区ふるさと祭り、海岸清掃、等)にボランティアスタッフとして参加することで地域の人々との交流を大切にしてきました。そういった経験を活かし今年も海燕祭を無事終えることができました。

先生方や先輩方、他大学の大学祭実行委員会のメンバー、地域住民の皆様の御協力があったからこそ海燕祭が開催できたとスタッフ一同心から感謝しています。

これから大学祭実行委員会は前年の反省点や改善点を見直し、個々が大きく成長していくことと思います。そして、来年の海燕祭をすばらしいものにできるように、今までの体験を活かして欲しいと思います。

学生部だより ～各界で活躍する卒業生～

船を造る仕事

内海造船株式会社 新造船事業本部
太田 教規

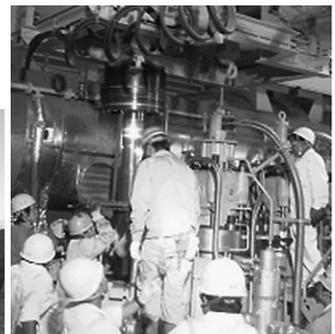
私は水産大学の海洋機械工学科を2006年に卒業し、広島県にある内海造船株式会社に就職して現在は新造船部門の機関担当技師として働いています。内海造船は、瀬戸内海に浮かぶ生口島と因島に瀬戸田工場・田熊工場・因島工場の3工場を構え、船の建造と修繕を行っています。新造船部門では、タンカー、自動車運搬船、コンテナ船、バラ積船、旅客船、フェリー、調査船など多種多様な船を建造して来た実績があります。過去にはシップ・オブ・ザ・イヤーも受賞しています。

機関担当技師は、船の心臓部である

機関室とその周辺の機器・配管・鉄鋼品関係の舾装工程管理、品質管理、機器の運転調整を行っており、良い船を高い効率で安全に造る責任を担っています。これら機械相手の仕事のほか、現場作業を円滑に進めるために船主建造監督、機器メーカー、社内のさまざまな部署との交渉・調整・作業指示など、人との連携を図る仕事も行います。これらの仕事を確実にこな



自動車運搬船(4300台積)



主機ピストン開放作業

し、高品質な船になるよう日々努力しています。私には、まだまだ覚えなくてはならない事がたくさんあるので毎日が勉強です。船体の大部分は「人」の力で造り上げられます。その分、一隻一隻に対する我々の思い入れには強いものがあります。自分が担当した船の引渡しの日には、その新造船が世界の海で活躍することを想い、他では決して味わうことができない達成感と感動に浸りながら海へ走り出した姿を見送っています。船を造ることは本当にやりがいのある仕事です。

社会人になって初めて思うのですが、学生生活は長いようでとても短いものでした。これから社会に出る皆さんは、学生である今しかできない事、水大でしか経験できない事をひとつでも多く体験し、一時一時を大切に社会で活躍していきましょう。

自分に合った仕事探し

生物生産学科56期 河本 真 治

私は、生物生産学科を卒業後、林兼産業株式会社に就職しました。林兼産業は現在マルハソーセージ事業部、キリシマハム事業部、養殖・畜産向け飼料事業部の三本柱から構成されており、私は飼料事業部下関工場で養魚飼料販売の営業マンとして働いています。

林兼産業の養魚飼料は国内シェア No. 2 の実績を誇っており、マルハブランドで培ってきた養殖に対する評価は今では世界中が注目するようになっていきました。最近のニュースで言えば、「マグロ用配合飼料ツナフード」が真新しいと思いますが、今後世界的な飼料展開を考えています。

私の仕事内容は、顧客である養殖業者へ訪問し、『顧客のニーズに沿って飼料販売を促進する』ことです。『顧客のニーズに沿う』とは、『どうすればコストを下げ計画生産ができるか教えて欲しい』、『病気で困っているから原因を追究して欲しい』、『ブランド魚を販売したいから特別な飼料を設計して欲しい』など様々ですが、顧客の悩みや相談に対して同じ目線に立って解決、フォローをする営業スタイルのことです。

就職時は大学の研究を生かし即戦力として働けるよう研究職を希望しましたが、その希望は叶わず、営業職に配属されました。しかし、元々魚が大好きで水産大学校に入学し、現在では養殖生簀を飛び回る営業職に就けたことは非常に幸運だったと仕事に誇りを持っています。



時には生簀や船から海に落ちることもありますが、顧客と一緒に考えを分かち合い、馬鹿笑いをし、魚の出荷の喜びを共に分かち合い、美味しい酒を飲むことは営業ならではのやりがいを感じます。

皆さんもこれから就職に関して悩む時期だ

と思いますが、まず『自分は無理だ』という先入観を取り払ってください。面接の時には周囲に東大、京大レベルのライバルも多いと思いますが、組織では必ず人間性が重視されるので、自分に自信を持ち、自分の特徴を生かした就職活動に力を入れてください。そうすれば、必ず縁のある会社に就職できるでしょう。また、企業は面接を落とす手段として考えているところが多いと思います。自分も最終面接で落とされたところが2社もありました。しかし、それは縁がなかったと割り切れば必ず良い環境に恵まれますので自信を持って就職活動に励んでください。

環境調査会社に就職して

中外テクノス株式会社 関西環境技術センター

計測技術室 松本 和 剛

(平成19年度 水産学研究科 水産技術管理専攻卒業)

こんにちは。水産学研究科卒業生の松本和剛です。学園だよりに仕事の現況や卒業後の感想を書いて欲しいとのことですので、簡単にお話したいと思います。



私は水産学研究科を卒業後、環境調査会社である「中外テクノス」に就職しました。研究室で水質調査・分析の研究をし、就職先も環境調査会社を志望していたので、内定を頂いたときはとてもうれしかったことを今でも覚えています。しかし、就職してすぐに壁にぶちあたりました。それは大学での知識だけでは不十分なこと、自分のやりたい事だけを選べないということです。私の配属先は環境計測グループで、生活環境の調査を行うのですが、騒音・振動や大気質の測定ばかりで、やりたかった水質調査や分析はほとんどやらせてもらえませんでした。さらに騒音・振動や大気質についての知識はほとんどなく、初めのうちは仕事を覚えることに精一杯で、あまりやりがいを感じず、自分は何をやっているのだろうといったことばかり考えていました。しかし、先輩社員に丁寧に教えてもらいながら、仕事を覚え、会社に馴染んでくると、今の仕事が楽しいと感じるようになってきました。やはり何事も経験してみることで、良さが分かるものであると実感しました。今では、簡単な騒音・振動・大気質調査や報告書の作成、客先対応などを一人でこなせるようになってきました。今後は大学で学んだ水質調査・分析の業務にも積極的に参加して、さまざまな観点から環境というものを見るようになっていきたいと思います。

さらに、私は仕事だけでなく、歓迎会や送別会、飲み会などで会社の人たちとコミュニケーションをはかる場を大切に、良い人間関係を築くことも忘れないようにがんばっています(笑)。やはり仕事で困ったときは周りの方々に助けてもらわなければいけないですね。今後も楽しく仕事をがんばっていききたいと思います。ありがとうございました。